

---

# ONE PIECE 不本意な転生者の生き様

M D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE 不本意な転生者の生き様

### 【Nコード】

N2712Q

### 【作者名】

MD

### 【あらすじ】

とある奔放な女神の身勝手により、ワンピースの世界に転生してしまった主人公。

しかも、女神のせいで原作知識を奪われて……この先一体どうなるのか!?

注：この小説は、オリ主チート、中二病、テンプレ、亀更新、ご都合主義等が多分に含まれる可能性があります。

そういったものに耐性の無い方は、ご注意ください。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

なるべく頑張りますので、よろしくお願いします。

## プロローグ

体が酷く怠かった。

恐らく、昨晩飲み過ぎたのが原因だろう。

大学の友人達と居酒屋をはしごし、浴びるように酒を飲んだことは覚えている。

しかし、そもそも何故そんなに酒を飲んだのか……思い出せない。  
そんなことを考えつつ、  
は何気なく手を体の横に伸ばした。

すると何故か、指先からはサラサラとした砂の感触が伝わって来る。  
どう考えても自分の部屋の床の感触ではない。

まさか、前後不覚に陥って公園の砂場で寝てしまったのか？

不安を抱えつつ  
が目を開くと……そこには抜けるような青空  
が広がっていた。

「……………はあ」

思わずため息が漏れるが、まあこれは予測の範囲だ。

もう手遅れかもしれないが、誰かに見られる前に気怠い体に鞭を打ち、上半身を起こす。

その瞬間、眠気が全て吹き飛んだ。

「……………は？」

そんな声しか出てこない。

彼の目の前に広がっているのは、よくテレビのコマーシャルで南国リゾートの宣伝に使われているような風景  
青い空に、白い雲。

そして、さんさんと降り注ぐ太陽を照り返し、眩しい輝きを放ちながら水平線まで続く、大海原だった。

たっぷり5分はフリーズしてから、ようやく口を開いて、

「……いや、待てよ。こんなのに」

言葉は、長く続かなかった。

目の前に起こっているあまりの事態に、手で顔を覆おうとして、気付いた。

その手が余りに小さい事に。

「……あてっ！」

再びフリーズしようとする　　の頭に、何か硬いものが当たった。

見てみると、それは手鏡だった。

何故そんなものが急に現れたのかはわからないが、　　は殆ど無意識に震える手を伸ばし　　鏡を覗き込んだ。

鏡には、将来性をひしひしと感じる整った造形の子供の顔が写っていた。いた。

特に印象的なのは黒に近い群青色の髪と、三白眼気味の黄金の瞳。

間違っても、良くも悪くも普通との評価を頂いていた自分の顔じゃない。

それを穴の空くほど確認してから、　　はゆっくりと鏡を下ろした。

そして、すうすうと大きく息を吸って、

「なんつっじゃこりゃあああああああ……!!!!」

あらんかぎりに叫んでみるも、当然、それに答える者は居ないのだ  
った。

思い切り叫び倒してから幾許かの時間が過ぎて、とりあえずいつまでもこうしているわけにはいかないと、立ち上がって周囲を見渡し  
てみる。  
すると、

「なんか、あからさま過ぎて近寄りたくないな……」

海の反対側には、鬱蒼と茂る森があった。

信じがたい高さの木々が乱立し、何処か蔽かな雰囲気すら立ち上っ  
ている森の入り口にぽつんと一つ、レンガの小屋が建っていたのだ。  
しかも、その家に注意を向けた瞬間、キィ、と小さな音がして小屋  
の扉が開いたのだ。  
すごく分かりやすく誘っている。

しかし、現状で他に出来ることが無い以上、行ってみるしか無いと  
考え小屋に入った。

しかし中に人はおらず、小さめのテーブルの上に手紙と葡萄に良く  
似た奇妙な果物が置いてあるだけだった。

果物はさておき手紙を見ると、それは『ファウストへ』とだけ書かれたただの便箋だった。

不審に思い、その手紙に触れた瞬間　世界が、停止した。

「なっ!？」

目に映る物が変化した訳ではない。

ただ、青白いフィルターがかかった様に視界が青く染まり、先程まで聞こえていた潮騒や海猫の声が消えた。

痛いほどの静寂が空間に満ちるなか、不意にその鈴を転がすような声は響いてきた。

「あら、漸く来たの？随分と遅かったのねえ」

声のする方を向けば、そこには青く染まった世界の中で、ただ一人元の色調で立つ絶世の美女　女神が立っていた。

無論、　　が女神等という存在と顔見知りな訳ではない。ただ、彼の魂とでも言うべき部位が、目の前にいる柔らかい笑みを浮かべた女は、そういう存在なのだと言っていた。  
しかし……

「どうしたの？そんな怖い顔して」

笑みを浮かべつつ、キョトンと首を傾げて聞いてくる女神だが、

は警戒を解けなかった。

当然だろう。今の自分の状況に目の前の女神が関わっていることは確定なのだから。

「……………このタイミングで現れたってことは、今俺がどういう状況なのか、説明してくれるんですよね」

「あら、以外と冷静なのね。でも、せっかちな男は嫌われるわよ？」

クスクスと声を漏らしながら笑う女神に、  
は黙って眉間にしわを寄せる。

それを見て、やれやれと言った雰囲気で女神が口を開いた。

「冗談が通じないのね。つまないわね、君。まあいいわ。安心して、ちゃあんと説明したげるから。…………一言で言つと、私たちの暇つぶしよ」

「はあ？」「聞こえなかった？ひ・ま・つ・ぶ・し。いやね、ここ最近の流行りなのよ。事故を装ったりして人の魂を回収して、それを別世界に入れてどうなるかを見物するの。ちなみに君の場合は、事故を装うのが面倒だったから直接存在ごとこっちに引っ張って来たんだけどね」

何も悪びれる風もなく、あっけらかんとんでもないことを言うてのける女神に、  
は激昂した。

「ふざけるな！じゃあ何か？俺はあんたがたの暇潰しのために死んでこんなトコにいるってのか！今すぐ日本に帰しやがれ！！」

「嫌よ、面倒くさい」

「なっ！」



「そもそも存在ごとくつちに持って来ちゃったんだから、もうあつちの世界に貴方の居場所なんて無いわよ？大体、あなた何であつちに帰りたいって思うのよ」

「何でつて、そんなの……」

当たり前前の事を聞いてくる女神に、当たり前前の答えを返そうとして……出来なかった。  
思い出せないのだ。

家族が、友人が。

どれだけ思い出そうとしても、彼らの顔は霞みがかつたように朧げで、輪郭すらも思い出せない。

それと同時に、様々な固有名詞を忘れていることに気が付いた。

自らや家族や友人の名前に始まり、住んでいた街の事、通っていた学校、行きつけだった飲食店など、個人を構成するための部品とも呼べるものが、いつの間にか穴だらけになっていた。

「記憶、が……」

呆然と呟く　　に、笑顔のまま女神は喋りつづける。

「あら、漸く気付いたの？鈍いのね、ファウスト」

「誰のこ」そんなに鈍くは無いでしょう？貴方のこちらでの名前よ。もう自分の名前は覚えてないでしょう？」……何で、こんな事をしたんですか」

再び怒鳴りそうになるのを必死に押し止め、  
ウストはとうた。  
いや、ファ

「記憶を操作したのは、ホームシックにかかってウジウジするのを

止めてあげるサービスよ。それと、繕わなくていいわ。貴方が聞きたいのはこういうことでしょう？』どうして自分がこんな事に巻き込まれているのか』って」

「っ！」

「図星って顔ね。で、どうして貴方なのかって話だけど、単に私の目に留まって、貴方が随分と幸せそうだったから。理由はこんなトコね」

今度こそ、ファウストは絶句した。

ただ、目に留まっただけ。

しかも理由は幸せそうだったから？

絶句するファウストを気にもかけず、女神は得意げにペラペラと話を続ける。

「いやね、他の奴らは死に神のミスで間違っただけ死んじゃった人とか、誰かを助けて死んだ高潔な人物だとか、そもそもこういつた願望をもってる人ばかりだったんだけど、それじゃあ詰まらないじゃない？だから、私を手を加えてあげたのよ。そもそも「黙れ疫病神」……何ですって？」

「疫病神を疫病神と言って何が悪い。てめえの考えなんて聞いてねえ、俺はこれからどうなるんだ、どうしろってんだ。答えるババア」「バツ……！失礼ね、人間！私にはフレイヤという名が「うるせえ、死ねババア」……人間の分際で……！」

瞬間、女神から凄まじい圧力が放射された。

冷や汗が吹き出し、思わず足が下がりそうになる。

人間の退化した本能が、必死に『ここから離れる！』と喧しく警報を鳴らす。

それを無視して、怒りのままになお虚勢にも似た言葉を重ねる。

「あ？なんだてめえ、カミサマを敬わない人間は要らねえってか？生憎俺は神様なんぞに興味ないんでな、こんな目に逢わせてくれやがったてめえらなんざもう死んだって敬つ、て」

今度は、ファウストが強制的に口を閉ざされる番だった。

先程までの奔放そうな表情は成りを潜め、能面の様な顔をした女神からは最早物理的な干渉力すらあるのでは無いかというほどのプレッシャーが溢れていた。

圧倒的な力に押さえ付けられ膝を付いたまま身動き一つ取る事が出来ないファウストに、激しい怒りを内包した女神の硬質な声が降り注ぐ。

「英雄ですらないただの凡愚風情が、私たちの暇潰しに役立つのよ？もろ手を上げて歓迎するべきものなのに……。本来だったら塵も残さず消滅させる所だけど……選ばせてあげるわ、人間」

女神はそう言うと、ファウストの眼前にゆつくりと、白く輝く靴に包まれた足を差し出した。

「嘗めなさい、人間」

「っ！誰が「口を開けとは言ってないわ」があっ！」更に圧力が増し、ファウストは小屋の床に押し付けられた。

ちょうど土下座の様な恰好になったファウストの頭上から、女神の優越感に満ちた声が降り注ぐ。

「貴様に出来ることは唯二つ……嘗めて生きるか、嘗めずに死ぬかほら、どうしたの？まさか転生した初日に死にたくは無いでしょ？」

何という理不尽か。

押さえ付けられ身動き一つ出来ないままでも、ファウストの思いは唯一つ……。

怒りだ。

ファウストは、理不尽を嫌う。

昔に受けた手酷いイジメの経験を源泉とするこの考えは、彼の根幹を形成するものだ。

ただでさえ、神だの暇潰しなので爆発寸前……いや、既に小規模爆発を起こしていた所に、この仕打ち。しかも、女神の視線には覚えがあった。

人を人として見ていない……虫を見るような蔑んだ視線。

それを確認した彼は、最早結果として自らがどうなるうとも、一片たりとも女神に従う気は無かった。

無論、ファウストとて従わなければどういふ事になるか想像できない訳ではないし、自殺願望があったりする訳ではない。

しかし、怒りが彼の反骨心を支え、行動を起こさせた。

少しの間動かなかったファウストが、にじり寄るように女神に近づき始める。

それをどう勘違いしたのか。女神は満足気な笑みを浮かべると、ファウストを押さえる力を少し弱めた。

少し自由になった体で、ファウストは女神に近づき……靴を嘗めると見せかけて、その純白目掛け、思い切り唾を吐きかけた。

呆然として、固まる女神。

それを満足気に眺めつつ、ファウストは口を開く。

「この俺が最も好きな事のひとつは自分で強いと思ってるやつに『NO』と断ってやる事だ。………分かったかクソ野郎」

豊饒神としての立場と、その美貌から人間はおるか同族たる神や、妖精達の間でさえずっとちやほやされてきた女神　フレイヤの、元々高くも無かった沸点は……これで完全にピークを越えた。

「人間！貴様ツ！」

「ぐうあつ！」

浮かべていた笑みは瞬時に溶け崩れ、今までで最高の憤怒を浮かべて女神はファウストを叩き伏せた。

「高が人間が！ヴァルハラに来たる事すら叶わぬ凡愚が！良くも、良くも神たるわらわに向かってこのような無礼をつ！」

ガツツ！

ギリギリと上から不可視の力に押さえ付けられ、身動きとれないファウストを、女神が蹴り飛ばした。

一発ではない。怒りに我を忘れたまま、何度も何度も足蹴にし、肩で息をしながらも頭を踏み付け、踏みにじる。

「くくくっ」

そうやって足蹴にされ、ボロボロになりつつも、ファウストはわらい声を上げた。

「……何が可笑しい」不可視の力がファウストを吊り上げ、女神と視線を合わさせた。

ファウストは酷い有様だった。整っていた顔は無惨に腫れ上がり、切れた脛や口からは血が流れている。

しかし、それでも彼の目は真っ直ぐに女神を射抜き、口元は嘲笑の形に歪んでいた。

「ゲホツ！……いやなに、女神さまって言っても、人間と大差ないもんだと……思ってな。怒って暴力で、押さえようとする所とかは、特にそっくりだ」

「ぐっ！この……」

切った口が痛むのか、切れ切れとした言葉で、しかしここまですべて尚はつきりと挑発を口にするファウストに、再び手を上げようとする女神だが、ファウストの笑みを見てその手を下ろした。

これではいけない。痛め付けるだけでは、この男に対する罰にはならない。

かといって、実際に殺したり、後に響くほどの痛みや怪我を与える訳にもいかないのが現状である。

いかに神がみと言えども、無差別に人間を使って遊べる訳ではないのだ。正確には、一人につき人間一体のみという制約が掛かっている。

それを破ることは、いかに彼女でも難しいし、これを今余りに痛め付けすぎれば、脆い人間は死ぬ可能性が高く……結果、観察対象が居なくなってしまう。

ならばどうするか、と考えて……何を思いついたのか、女神はニマア、と美しくも厭らしい笑みを浮かべた。

「ああ、なんと哀れな人間でしょう。敬うべき神を理解することすら出来ず、望まぬ罪を重ねるなんて……」

急に芝居がかった口調で語りだした女神に訝しげな視線を送るファウストだが、女神はファウストなど居ないかのように歌うように語り続ける。

「ああ、しかし偉大なる主神ヴォータンよ。私は彼をを許します。彼とてきつと望まぬ事であったのでしようから。しかし、何もしいのでは、他のものへの示しがつきません。従って、望まぬ事ではありませんが、私は彼に罰を与えましょう……」

「なっ、てめえ！ぶざけんな、何処まで身勝手だ！」

力のせいで暴れる事すら叶わず喚くしか出来ないファウストを無視して、女神は指先に光を点し、ファウストの額に当てた。

「彼にはこれより大いなる試練が降り懸かるでしょう。祝福あれ」

瞬間、額に衝撃が走り……女神の浮かべる三日月の様な笑みを最後に、ファウストは意識を失ったのだった。



## ブローグ（後書き）

誤字脱字、ご指摘等ありましたらお知らせ下さい。

感想もお待ちしております。

## 第一話〜テンプレとチートの予感〜（前書き）

第二話です。

タイトルが意味わかんないとの御指摘を頂きまして、自分でも一話読んで意味のわからないタイトルはダメだと考えまして、変更させて頂きました。

投稿した次の日にタイトル変更……不安しか有りませんが、がんばります。

## 第一話〜テンプルとチートの予感〜

「くっ……あのクソ女神め……」

女神に気絶させられてからどれ程の時間が経ったのだろうか。

何とか身体を起こすと、目の前には先程のとは別の手紙と、『サバ  
イバルセット』と書いてある袋が落ちていた。

袋の方には、書いてある通りのもの ナイフや火打ち石、ロープ  
などと、何故か『六式教本』、『これであなとも覇気使い』なるタ  
イトルの本が計六冊入っていた。

ちなみに、それぞれ全三巻（基礎編、応用編、発展編）の分厚い本  
である。

胡散臭い事この上ないが、それは一先ず置いておくとして、問題は  
手紙の方だ。

またカミサマ何ぞに会うのは真つ平だぞ。

そんなことを考えつつ手に取ると、中には普通の便箋が入っていた。

「よかった、今度は妙な仕掛けは無いみたいだな」

安堵しつつ手紙を読み進めていく。

が、読み進むごとにファウストの顔は徐々に強張っていき……最後  
まで読み終わった瞬間、その手紙を握り潰した。

そして、小屋の外に飛び出し、天を仰いで、



ちなみに、P・S・には女神から『これが神をバカにした代償だ』  
といった内容の文が、本文以上のボリユームでネチネチと書かれて  
いた。

「くそ、何でこんな事に……」

女神から理由を聞いて、最早どうにもならないことは分かっ  
ていても、口にせずには居られなかった。

まあ、あの時女神にケンカを売ったこと自体は後悔してはいないの  
だが……。

原作知識の欠落は、相当の死活問題といえた。

ファウストは だったころ、かなりのマンガ、ラノベ好きで、  
無論ワンピースも全巻持っていた。

何度も読み込んだおかげで、ストーリーをそらで言えるほどには詳  
しかったのだが……今では、凄く曖昧にしか思い出せない。

主人公の名前が、モンキー・D・ルフィだということはわかる。

しかし、こういった状況で島を出たかとか、能力だとか、この先の  
ストーリー……アルビダと戦うというのが思い出せない。

『何か』能力を持っていることや、早くに『誰か』と戦う……とい  
ったことしかわからないのだ。

どうやら、単行本読みから雑誌の流し読み程度に知識が劣化したら  
しい。

「嘆いていても始まらない、か」

呟くと、取り敢えず覚えていく知識を、知覚に落ちていた棒を使って小屋の壁に書き込んでいく。

一通り書き終えて、ふとファウストは空腹を覚えた。

「腹も減ったし……食うべきなんだろうなあ、これ」

悪魔の実である。

形は巨大な葡萄で、毒々しい紫色に、メロンのような網目模様。

ぶっちゃけ食べたくない。

だが、そんな事を言っている場合では無いのだ。

ワンピースの世界は、野性動物一つとっても元の世界の猛獣とは比べものにならないものが、多数存在する。

加えてここは無人数島。これから生きていくためには森から食料を取らねばならんが、たかが肉体五歳児がそれを出来るほど甘くはあるまい……。

と、いついかならぬ。

「あむっ。……まっず」

一口食べて吐き出しそうになるも、何とか堪えて飲み込んだ。しかし、実はまだまだ残っている。

本来ならば、一口で良いことを知っているため、ここで止めたのだが……。

女神の悪戯イヤガラセで、キャラクターやストーリーで無いにも関わらず、この一口ルールを忘れてしまっていたのである。

結果……………

「……………（吐き気を必死に堪えている）」

真っ青な顔でうずくまる子供が一人出来上がった。

マズイと知りつつも、それを大量に食べねばならない……………これ程の苦行もなかなか無いものである。

「うっぷ。…………さて、と」

吐き気が収まったので取り敢えず外に出て見るも、何か変化があったようには思えないが、

「っあ！」

急に頭痛がしたかと思うと、頭の中に自らの知るはずの無い情報が流れ込んできた。

カミサマのサービスか何かなのだろうか？

「…………ふう、収まったか。しかし、何だか凄い実だな？」

苦笑しながらこれがチートと言うものか、などと考えているファウストが食べた実の名前は、へびへびの実。

より正確には、動物系へビへビの実、モデル：『ヨルムンガンド世界蛇』。  
数ある悪魔の実のうち、珍しく強力な力の多い自然系ロキアよりも更に希  
少な幻獣種の中でも、その更に極一部のみに冠せられる 神獣種  
の一つである。

ヨルムンガンド 北欧神話において奸計の神ロキと、巨人族のア  
ンクルボザとの間に生まれた三体の子の一つ。

その身体は余りに巨大で、神の住む世界を取り巻いて自らの尾をく  
わえる程とされている。神話の怪物蛇で、最終的には神の内の一  
雷神トールと死闘の末に相打ったとされる。

正真正銘のバケモノである。

「さて、どんなものかためして……っ！」

実の力を確認しようとしたところで、

ドドドドドドツ！！

という地響きと共に、体長8メートルはあろうかという巨大な猪が  
森から姿を表した。

「プギイイイイイイツ！！！！」

叫び声を上げながら、猪は真っ直ぐファウストに突進してきた。

現代では絶対に有り得ない光景に気圧され、ファウストの体が硬直  
する。

何せ、象くらいデカイ猪が、敵意剥き出しでこちらに向かって来る



のだ。

恐怖するなというのに無理がある。

だが、ファウストはかなりの早さで硬直から脱することができた。それは、直前に猪などとは比べものにならない女神からのプレッシャーを受けていたことが原因なのだが……いくら冷静になれたところで、体は五歳児である。

「ああ、くそ！ぶつつけ本番ってのは嫌だったけど！」

猪の巨体とスピードから、かわすことは不可能だと判断して実の力を発揮させた。

その瞬間、ファウストの身体は、彼の食べた実に宿った悪魔によって変革される。

身体が勢いよく伸びながら巨大化していく。その全身は髪と同じ、殆ど黒に見える濃い群青の鱗と甲殻が鎧の如く覆い、目は爬虫類の縦長に切れた瞳孔となる。

口には鋭い牙が立ち並び、たてがみのように伸びた一部の鱗のせいで、頭部は蛇と言うよりはむしろ竜に近く見え、さらに蛇としては驚くべき事に、胴体からは逞しい腕が生えていた。

だが、やはり最大の特徴は、その巨大さだろう。

最も太い胴回りは直径約2メートル。

その体長は、実に約50メートルもある。

何故か、ファウストに驚きは少なかった。それどころか知識を埋め込まれた影響なのだろうか、本来分かるはずも無い蛇の体の動かし方までが良く分かった。まず、突進してくる猪に対し、上半身を持ち上げる。鎌首をもたげる体制になると、身体の奥から込み上げ



「……………悪く思つな」

ゴキンツ！

意味の無い言葉を呟いて身体を締め付けると、鈍い音と共に全身の骨を砕かれた猪は絶命した。

猪が倒れ、ファウストは人に戻り、

「……………呆気なかったな」

ポツリと呟いた。

しかし、その顔色は決して良くはない。

確かに絞め殺す気で攻撃したのは確かだが、これだけの異様の野性動物が、戦いどころか今まで自分では小動物すら殺したことの無い外見五歳中身二十歳に、これ程あっさりと。

与えられた力の大きさに震えが来る一方、感じるかと思っていた生き物の殺害に対しての忌避感はまだあまり感じなかった。

これもカミサマの影響なのかなー、とも考え、また腹立たしくなってきたが、何はともあれ。

「まあ、色々考えなきゃいかん事はあるが……………取り敢えず食ってから考えるか」

そう言うと、サバイバルセットのナイフと火打ち石を武器に、ファウストは再び猪（大量の肉）との戦いに身を投じたのであった。

「ふう、中々旨かったな」

そう言つて、ファウストは最後の骨を放り出し、満足そうに地面に寝転んだ。

パチパチとたき火が爆ぜ、その横は、夥しい数の骨が散乱している。それらは言つまでもなく先程の猪の成れの果てである。

「しかし、悪魔の实の影響なのか？俺明らかに自分の体積より肉食つたよなあ……」

そう、ファウストはたった一人で8メートルもの猪を全て食べきつたのである。

それについて、ちょっと疑問に思ったファウストだったが、

まあ、いいか。マンガの世界なんだからこれくらいは『有り』だろう。

そう考えて、ファウストは思考を打ち切った。

今の状況を自らが存在する新たな現実と考えず、『マンガだから』という理由で納得する……。

その思考の危険性に気付かぬままに、ファウストは自らのこれからについて、考えを巡らせた。

まあ、取り敢えず修業は必要だろう。そもそもこの島から出ることが出来るのかが怪しかったりするけど……まあ、やっておいて損はないだろう。原作を上手く思い出せない以上、自分から関わっていくのも難しいだろうし……何より、あの身勝手女神の言いなりみたいでムカつくから別にする必要もないな。取り敢えず明日からこの小屋を拠点に、島を探索していくか……。

そんな風に呑気に考え、寝る準備を始めているファウストだが、これは無理からぬ事である。

今だこの世界に来てからは一日も経ってはおらず、それも女神との邂逅、悪魔の実の摂取に初めての狩りと、それなりに濃厚な一日であったのだ。

気が抜けるのも無理はない。

そして、基本は現代人のファウストである。だから、知らなくて当然の事なのだ。

『火は、一定以上の知能を持つ動物にとっては、むしろこれをおびき寄せるだけの代物である』という事は。

故に、この結果は必然だった。

「ん？今、何か森の方から……」

不審に思っただけを見ても、最早手遅れだった。

「……なんでさ」

思わず某正義の味方の口癖を使ってしまったファウストだが、無理

はない。

視界に写るのは、木々の隙間の闇の中に浮かび上がる一対の目。

それも、一組二組の騒ぎではない。

色合いも大きさも異なるものが見えるだけで何十組も確認できた。

「ハ、ハハハハ……。……マジかよ」

『グギヤアアアアアツ！！！！！』

「不幸だあああああつ！！！！！」

ファウストの長い長い夜は、始まったばかりなのであった。

## 第一話〜テンプレとチートの予感〜（後書き）

大して深く考えもせずにおり設定を出してしまいました。

良いのかなあ……。

そして今回説明多いですね……精進します。

さて、こんな駄文ではありますが、それでも読んでくださる神様な読者様に、最大級の謝辞を。

第二話「原作との邂逅」(前書き)

今回は、キングダムゾンが発動します。



## 第二話 原作との邂逅

その日、偉大なる航路グランドドライヴのとある名も亡き島に、とある船が近付いていた。

その島には他の島には居ない珍しい動植物が多く存在すると言われており、捕まえて売れば何かしらの稼ぎになるかもしれないと立ち寄ったのである。

「サルトルの頭あ、いつでも上陸できますぜ」

「ああ。気をつけて行きたまえ、この島は発見されて間もないのだ、何が出てくるかわからないぞ。それと、さつき運よく手に入った商品はちゃんとしているんだろっな？」

「もちろんでさ、しっかり部屋に閉じ込めてやす」

「それは重畳。大事に扱い給えよ、あれ程の上物ならば良い値で売れるのだからな」いかにも下っ端口調な部下の返事を満足そうに聞いた身奇麗な男は息を深く吸って号令をかけた。

「では、諸君！じょうり『ギャオオオオオオオツ！！！！』」

サルトルの号令を遮り、船員達の乗る船の周囲の海から姿を現したのは、うつぶさを巨大にしたような姿の怪物だった。しかも、一体ではなく何十体も。

「かつ、海王類！」



に見える。その体は形状的には蛇と言えた。ただし、その胴体からは普通の蛇としては有り得ないことに、腕が生えていたが。加えて頭にはたてがみに似た特殊な鱗が生え、眼窩には爬虫類や海王類と同じ縦長の瞳孔をもった黄金の瞳。その様は、物語に出てくる竜に良く似ていた。

そして、何よりの特徴はその巨大さだ。船からでは良く確認できないが、体長は優に100メートルを越すだろう。

その海王類が子供に見えるほどの威容に誰もが立ち尽くす中、その怪物が海王類達を睥睨した。

別に吠えたりするようなあからさまに威嚇する行動をとった訳ではない。

しかし怪物の視線が彼等を捉えた瞬間、すべての海王類が紛れも無い恐怖をその顔に浮かべ、文字通り尻尾を巻いて逃げ出したのだ。ただし、それで自分達が助かったと思えるほど、楽観的になれる船員はいなかった。

(くっ……！こんなところで死ぬ訳には！)

サルトルが、恐怖に固まった船員達を動かすため、声を上げようとした時。

怪物に変化が現れた。

「なっ！」

その巨体が見る見るうちに縮み、呆気に取られる船員達の前で、標準的な いや、むしろかなり小さめの人型に姿を変えたのだ。

「悪魔の実……？」

誰かが、呆然と呟いた。

確かに、動物系の悪魔の実ならば、動物に変身することが可能であるが……世界の神秘の大半が集うこのグランドラインにおいても、あれだけの大きさに変化する動物系など、それなりに様々な情報に詳しいと自負するサルトルでも聞いたことがなかった。

（あるとすれば、動物系の中でも珍しい幻獣種。いや、あるいは最早伝説的存在である神獣種の可能性すらあるかもしれない！）

サルトルは、思いもかけず転がり込んできた商売のチャンスに打ち震えていると、

「オーイ！今なら大丈夫だぞ！」

その人影がこちらに向かって手を振りながら、こちらに呼び掛けているのが確認できた。

「……御頭、何か好意的っぽい様に見えるけど、どうしやす？」

船の副長が、不安を顔に浮かべてサルトルに問い掛けた。

いくら好意的に見えるようとも、あれだけの巨体に変身していたのだ、警戒しないほうがどうかしている。

他のクルーも似たり寄ったりで、不安そうにしながらも黙って船長の決断を待っている。

「決まっている、上陸だ。……安心し給えよ、諸君。私が全て上手くやるさ、上手く、ね。ククク………」

暗い笑いを浮かべながら、サルトルとその一行は名も亡き島へと上陸を果たした。

「……おお、こっちに来る。……何年振りかなあ、他人と話すのって」

船が近づく岩場には、長い群青の髪を潮風になびかせる少年 女  
神に連れて来られてから8年が経過して、十三歳にしてはかなり逞しく成長したファウストが感慨深げに呟いた。

自然とこれまでのことが思い出されて来る。

8年間。言葉にすれば短いが、決してそんな事は無い。

最初は、苦難の連続だった。

あの夜の襲撃で小屋は全損、住家を奪われ、獣に追われたファウストはしかたなしに森に入ったのだが……そこには既に島の強力な猛獣達による確固としたテリトリーが区切られていたのだ。

それも、8年前のファウストでは例え実の力を使おうが絶対に勝てないような、超強力な連中によって。

故によそ者たる自分は、始めの2年は常に餓え、怯え、ろくに眠ることすら出来ない日々が続いた。

そして何とか2年かけて縄張りを持ち、本を使って本格的な修業を開始してからは時間が早く流れていった。

自分は、武芸の才能についてはそこまででもなかったらしく、『六式教本』の基礎編を習熟させるのに約二年。応用編に約三年、発展編は今だ修業中。

『これであなとも覇気使い』についても六式と似た様な習熟度なのだが、見聞色とは相性が悪かったらしく他二つに比べて随分と成長が遅かったりする。

だが、一番むしろ大変だったのはこの時だったろう。

最初は生きることに必死で何も考える余裕が無かった物を、下手に生活に安定感が生まれたせいで無駄に色々な事を考えてしまい、結果海にダイブしそうになったことも何度があった。

気が狂いそうになるような夜の静寂に耐え兼ね、無謀とも言える突撃を仕掛けたことなど数知れず。

そんな事を続けるうちに、この島の主的な立ち位置になったりしたのだが……閑話休題。

それ以上に辛かったのは……かつての世界について、何も未練を抱かないという事実だった。

女神の言った、『ホームシックにならないためのサービス』は遺憾

無くその効力を発揮し、結果ファウストはかつてを思っただけで泣くことすら出来なくなっていたのだ。

今ではもう思い出すことすら不可能となったが最初はかつてを思い出せない訳ではなかった。

ただ、思い出を無理矢理セピア色にされたようだった。時間の経過を以ってではなく超常の力をもって記憶を劣化させられ、ただやるせなさだけが募るためなるべく考えないようにして……結果、思い出すことすら出来なくなったのだ。

「やあ、助かりました！この幸運に感謝しますよ」

昔について思いを巡らせているうちに、島に到着した船から一人の男 船員からサルトルと呼ばれていた者が声を上げながら姿を現した。

色黒で、良く手入れされた口髭を蓄え、白いハットに同色のスーツをそつなく着こなすそのさまは、とても船乗りとは思えなかった。

その見た目に違わず拳措が上品な男は、明らかに自らより年下のファウストに対して優雅な……しかし、どこか芝居がかった動作の礼をした。

「先程はどうもありがとうございました、私はサルトル。親しいものからは『伊達男』と呼ばれている、しがたい冒険家でございます。あなたは？ここは、地図にすら乗っていない無人島のはずですが……」

「俺はファウスト、この島に暮らしている者だ。随分前に乗ってい

た船が嵐に遭って、ここに流れ着いたんだよ。」

「なんと！貴方のような、年端も行かぬ方が……それは大変だったでしょうなあ。いやあしかし、これも今日の劇的な出会いを演出するためのもの、と考えるのであれば、これは気まぐれな神に感謝せねばなりませんなあ。」

「ハハハ……気まぐれな神、ね……。」

一々仕種や言動が大袈裟なサルトルの比喩があまりに的確すぎて、ファウストは引き攣った笑いを漏らすしかなかった。

「ところで！誇りある冒険家の私としては、このまま礼の一つも返せないままというのはいささか信義に反する……。どうですか、これから目的地到着を祝って祝杯を挙げるのですが、それに同席しては頂けませんかな？」

それには気付かず、良いことを思い付いたといわんばかりに、早口でまくし立てるサルトル。

「喜んで！」

8年間他人と喋ることをしなかったファウストは、一も二も無く了承したのだった。

「さあ、今宵は無礼講だ！存分に楽しんでくれたまえよ！」



サルトルの音頭で船に積んであった食料に、ファウストの取ってきた果物と獣肉を使って盛大な……とはいかないものの、それなりな規模の酒盛りが始まった。

「さあ、ファウスト君。色々積もる話もあるでしょうが、先ずは一口」

この時、ファウストは他人との会話や酒に餓えていた。

ファウストは元々あまり社交的だった訳ではない。

しかし、8年人と話すことをしなければ淋しさを感じるのは避けられず、人との関係を求めるのは無理もないことで、その機会を与えてくれた人々に、そもそも警戒しようという考えすら起こらず。

「ありがとうございます。……ふむ……。随分と、強めの酒ですね。あと、妙な苦みがあるような……？」

「え、ええ。私の故郷の酒ですが。お気に召しませんでしたかな？ 酒に関しては一度自分で作ろうとして、ただ果物を腐らせただけに終わってから諦めていたため、もう酒という飲み物がどんな味も忘れかけていた。」

「いえ、これはこれで、中々……」

だからこそ、その味の違和感に気付けても、簡単に誤魔化され。

「さあさあ、もっとグイッと行ってください。今日の主役は君なのですからな」

たったの一口でやけに視界が揺らぎだしたのも久しぶりに飲んだせいだろうか考え、言われるままに更に酒を煽って……………。

（あ、ね。何で…………視界、が歪む、んだ？……………や、っぱり、この酒…………へ、んだ、ろ…………）

ファウストは意識を失った。

「むう…………。こじ、は…………」

次にファウストが目を覚ましたのは、薄暗い部屋の中だった。

「そつだ、俺はあの時酒を飲んだまま寝ちまって…………ん？」

起きて周囲を確認しようとして、気付いた。

体には幾重にも重なったロープが負かれており、頑丈な手枷と足枷が嵌められていることに。

「なっ！…………いや、落ち着け。こんなロープ位…………！」

「無駄ですよ、ファウスト君」

計ったようなタイミングで靴音を響かせながら現れたのは、先程までの友好的な表情とは似ても似つかない優越感と達成感に満ちた嫌

な笑顔を　あのクソツタレな女神と全く同じ種類の表情を浮かべているサルトルだった。

それを見た瞬間、ファウストは混乱しかけた頭が一瞬で冷えたのと同時に、自らがとんでもない過ちを犯したことを自覚せずにはいられなかった。

「最初っから、これが目的だったのか……!!」

自分は舞い上がっていたのだろうか。

考えるまでも無くYES。

いくら人に会えて嬉しかったからといって、警戒を怠って良い理由にはなりえないというのに。

人間とて動物なのだ。それを、自分はただ人間だというだけの理由で縄張りへの侵入者に対して警戒を解いてしまった。

その結果がこの無様。

つまり今の自分の状況は、半分は自業自得ということか。とファウストは結論づけた。

無論騙したやつらも殺したいほどに憎らしいが、それ以上に自らの迂闊が恨めしかった。

「フフフ……ファウスト君、ようこそ我が船に！猛獣用の特注ロ―プに、海楼石の手枷と足枷はお気に召しましたかな？」

そういつて、貼付けたような笑みを浮かべながらサルトルはファウストの目の前の椅子に腰掛け、足を組んだ。

「……サイコーの気分だよ。思わず目の前のエセ紳士を挽き肉にし

てやりたいって思うくらいにな」

「ハハハハッ！減らず口はきけるようですねえ。関心関心。ところで……君は私に何か、聞きたいことがあるのでは無いですか？私は今非常に気分が良い。出来る範囲なら質問に答えてもいいと思っっているですよ。たとえば……何故君がこんなめにあっているのか、これからどうなるのか……とかね」

「聞きたいこと何ぞねえよ。あえて言うなら、てめえと同じ空気を吸うのが不愉快だ。とつとつここから消えるかシネ」

「おお、怖い怖い。しかし、本当に良いのですかな？知ると知らないとは「シャボンディ諸島の奴隷商人か、その下請の人さらい。これがあんたらの正体だろ」……何を根拠に」

余裕に溢れたサルトルの表情が、少し不機嫌そうになった。

それを確認して内心ほくそ笑みつつ、ファウストは淡々と推測を口にする。

「何って、俺をさらってる時点で確定だよ。奴隷制度なんてクソツタレなものがあるのは天竜人のいるあそこマリージョア位。それ以外のところで人さらい稼業なんざやって行ける訳も無いし、俺みたいな孤児をさらった後の使い道なんてそんなもんしか無いだろ。違うか？」

外見は13歳でも、中身は28歳のファウストには、このくらいの推論は容易い。

しかし、まだ年端も行かぬ、無人島でくらしたという野性児のような人物が捕まって身動き取れない状況にも関わらず冷静に正解を当

てて見せたのだ。流石に面食らったのか、サルトルは随分と驚いた顔をして、しかしすぐに仮面の笑みを貼付け、パチパチと気の無い拍手をした。

「エクセレント！正解だよ、ファウスト君。……まったく、君はやはり規格外だよ。お陰で私の楽しみの一つが台なしだ」

そう言つて、興味を失つたといわんばかりに椅子から立ち上がり、ファウストを片手でつまみ上げ、部屋の外に出た。

「……楽しみつて、どうということだ」

吊り下げられたままファウストが問うと、どこかに歩きながらも呆れた表情でサルトルが答えた。

「全く……本当に子供らしくない子供だよ、君は。私が商品となる君を傷付けられないことを見越して発言している。……まあいい、答えよう。……君はそうはならなかったんだがね、普通の子供に君が自力でたどり着いた事を話してあげるんだよ。そうすると……」

そこで一端話を区切り、そのことを思い出したのかサルトルに恍惚の表情が浮かぶ。

「話してあげるとね、ファウスト君。泣き叫ぶ者、癩癩を起こすもの、呆然とするもの……色々とあるのだけれども、彼等に共通するものがある。それは目を見れば良くわかるのだが……さて、ここで質問だ、ファウスト君。それが何か……わかるかね？」

何が楽しいのか、スキップされ踏みそうな程に弾んだ声で抱えたファウストにサルトルは問うが、ファウストは慥然としたまま答えな

い。

しかし、その反応が満足だったのか、満面の笑みを浮かべてサルトルは自らの欲望を語り聞かせた。

「そう、恐怖だよ！ファウスト君！私の口から絶望を告げられた瞬間の彼や彼女の瞳！あれに勝る宝など、この世には存在しないと確信できるね」

そう語るサルトルの表情は、夢を追いかける子供のような顔をしていた。

「……ヘンタイが、気持ちワリイ妄想をぶちまけんな」

「フフフ、真の芸術はいつも理解を得づらいものなのさ……まあ、それはいい。……さて、この部屋だ」

サルトルある部屋の前で立ち止まると、ドアを開けてファウストを放り込んだ。

「いてっ！」

「ここが航海の間の君達の部屋となる。もうすでに何人か住人がいるが、まあ、仲良くしてくれたまえ。それでは、ごきげんよう！ファウスト君！フハハハハハッ！！」  
それだけ言うと、返事も聞かずにサルトルは何故か高笑いを響かせながら去っていった。

「くそっ……あいつは何時か絶対に殺す！」

海楼石のせいで常に脱力し、受け身すら取れずに変な体制で床に突

つ伏しながらファウストは呪いはいた。

そういえば、同居人……つまりは、将来の奴隷仲間がいるはずだ、と視線を巡らせるようとすると

「ぬおっ!？」

ポフツ!……ゴン!

「……っ!」

何故か部屋の隅から枕が飛んできて、ファウストの顔にクリーンヒット。おまけに倒された勢いで後頭部を床に強打し、悶絶するファウスト。

「だれ「来るでない、男!」は?」

涙目になりつつ、枕が飛来した方を確認する。

そこにいたのは、暗がりで身を寄せ合うようにして震えているウェーブのかかった髪の二人の少女と、それを守るように敵意を剥き出してこちらを睨む、ファウストとほぼ同じ年頃の長い黒髪をもった美しい少女だった。

「私達に指一本触れてみる!すぐさま殺してやる!」

その口調、『男』を強調したこと、三人の少女、奴隷船、長い黒髪、そして、今でさえ将来への片鱗を見せている傾国クラスの美貌。

それらのピースはファウストの虫食いだらけの記憶をつぎはぎし、

彼の記憶に明確な形を取り戻させた。

「……もう一度聞く。誰だ、お前は。名前は」

「私の名は、ボア・ハンコック！誇り高き九蛇の戦士じゃ！！」

「……マジかよ」

この二人の出会いこそが、ファウストの第二の人生における大きなターニングポイントとなるのだが……それを理解しているのは、どこかの空間で嬉しそうな笑みを浮かべながらファウストを見る女神、ただ一人であった。



## 第二話〜原作との邂逅〜（後書き）

……やってしまいました。

ち、ちがうんです。私はただエセ紳士なキャラを書きたかっただけなのに……！

どうしてこうなった。

……まあファンフィクションだし、いいか。

……さて、私の言っていることが理解できるよ！という同士の方に  
お聞きしたいのですが、もうここまで来たら名前もあの人にするべき  
でしょうか？

よろしければ感想にてご意見を下さると幸いです。

あ、普通の感想や批評、ご意見等も遠慮無くお寄せ下さいね。  
それでは。

### 第三話「イベントは親愛への第一歩」(前書き)

特にコメントなど見受けられなかったため、名前変更は無しでいきます

### 第三話〜イベントは親愛への第一歩〜

「……………はあ」

居心地が悪かった。

サルトルたちに捕まってから一日が経過したが、いまだにハンコック達とは会話の一つも行われていない。

そもそもこの部屋にいるのは、仕方の無いこととはいええ男に偏見を抱いている九蛇の少女三人と、八年を無人島で過ごした社交性など皆無の自分のみ。

当然、きつかけすらないままに自分を全力で警戒する人間と友誼を結べるほど、ファウストのコミュニケーション力は高くない。

いや、その努力をしなかった訳ではない。

自分の名前は伝えたいし、何とか折を見て話そうともしてみたのだが、それも話し掛けようと近寄ったときに向けられたハンコックの視線の種類を察して諦めた。

彼女がファウストに向けていた視線は、かつてファウストが島でよく見た動物のものと同じなのだ。

それは、後ろに自らの子供を背負った親の視線。例え死んでも子を守ると思った、その時の彼等ほとんどでもない力を発揮する 決死の表情だ。

そんな状態のハンコックと普通に話せる自信はファウストには無かった。

ついでに言えば、未来においては世界一の美女とまで言われるほど

の美しさを持つハンコックに、憎しみ全開で睨まれたせいで対人スキルの貧弱な精神が多大なダメージを受けていたりすることも原因である。

だから、色々なことについて考えた。

べつに積極的に考える気など無いのだが、やる事が無いためついつい普通考えないようなことまで考えてしまう。

まず考えたのは、今の状況の再確認。

超凶悪なハンコック達と、一つの部屋にいる。自分が船に乗ってからは一日が経過し、何か変化のあった様子は無し。

海楼石の手錠、足枷はしっかり嵌まっており、抜け出すことは不可能。ついでに言えば、あの爆発する首輪もつけられている。

そして、知識だ。

今、自分は『海賊女帝ボア・ハンコック』についての知識を完全に思い出していた。

加えて、『ボア・サンダーソニア』『ボア・マリーゴールド』についても。

どうやら、ある程度こちらでその人物に接触できれば、原作の事が思い出せるらしい。

ただし、やはり思い出せたのはその人物に関する事のみ。例えば、彼女がルフィに惚れ、インペルダウンへの手引をしたという事は思い出した。が、そもそも何故ルフィが女カ島にいるのかはわからないままなのだ。

まあ、知らないよりはマシだと考え、更にこの事から考えついたある可能性について模索する。

つまり、あの女神は、今でも自分の人生に介入しうるのか、ということについて。

端的に言えば、彼女が退屈しないための『テコ入れ』はあるのか、ということだ。

普通、ここまで急にピンポイントで思い出すことなどしない。更に今回の事だって、サルトル達が来たのは本当に偶然なのか？人さらいがあんな未開の孤島にわざわざやって来るのか？

しかも、原作キャラたるハンコックたちを乗せて。確率は確かに低いだろう。

しかし有り得ない事ではなく、証拠なども無い以上、女神の仕業と断定もできず……。

「つまり、考えるだけ無駄ってことか」

呟いて思考を打ち切って、ファウストは不安に駆られている二人の妹を励ますハンコックの横顔を盗み見て思った。

流石、未来の海賊女帝って所か。

今の時点から、早くも海賊女帝としての風格が出ている。

自分は、精神は二十八歳だし、知識のお陰でこれからどうなるかがある程度知っているため、表面くらいは冷静でいられる。

だが、勿論彼女らにそんな物はない。仲間と離れ離れになり、全く未知の存在である男達の中に放り込まれたのだ。

事実、彼女らには既に殆ど男性恐怖症だろう。何せ、手足を縛られて戦闘能力など彼女等以下の自分に対して、サンダーソニアとマリーゴールドは今でも怯えた視線を送っているのだから。

それが当然だ。人攫いに捕まった人間は九蛇の少女としては。しかし、守るべき者達を後ろに抱える気高き未来の女帝はそうならない。

こんな状況でも彼女は目に強い光を宿し、先の見えない暗闇を見据え、凜と、ただ強くあろうとする。

ファウストは、今まで彼女はただ見た目が美しいから未来において世界一と呼ばれるようになるのだらうと思っていた。

それに間違いは無い。全く正しいことだ。すごいな、これが世界一の美女。真に美しいものはその魂までも美しいって訳か。

だが。

(このままじゃ、危うい)

いくら強いとは言っても、まだ十二歳の少女に過ぎないのだ。感じているストレスは並大抵では無いだらう。

だが、男のファウストにはどうしようもなかった。寧ろ悪影響しか与えていないだらう。何せ、彼が来るまでここは曲がりなりにも女だけの場所で、ハンコックが息を抜いていられる場所だったのだらう。ファウストはそこを奪ってしまったのだ。

ファウストがそう考えて、自分が悪い訳ではないが罪悪感をキリキリと感じていると、ドアを開けて粗野な恰好をした男達が部屋にずかずかと踏み込んできた。

ハンコックが瞬時にファウストと初めて会ったときの目になる。

「ほらよ、今日のメシだ」

そう言って警戒するハンコック達に投げ渡されたのは、一人につき

二つの固いパンと、水だった。

「あと、おかしらからの言い付けでな、その黒髪にはこれもだ」  
ハンコックと追加で渡されたのは、余り多いとは言えないがチーズと塩漬けの野菜と肉だった。

それは取りも直さずハンコックの商品としての価値を示している。

因みに、ファウストはというと。

「これがお前の分だ」

脱水症状を起こさないための水はあったが、パンはハンコック達よりも半分程のサイズしかないものが一つだけだった。

能力者を競りまでにある程度弱らせるには最高のやり方だと、ファウストも思う。

実際に喰らった気分は最低だが。

「……これだけか？」

「生かしてもらえただけ感謝しな、能力者」

そういつて、部屋を出ていこうとした男達の前に、ハンコックが立ち塞がった。

「私達を解放しろ、男！」

高圧的なハンコックの口調が気に障ったのか、一人の男が立ち止まって凄みの効いた声で怒鳴った。

「うるせえ、商品が口答えすんじゃねえ！」

「商品などではない！誇り高き九蛇の戦士じゃ！」

言うが早い、ファウストが制止する暇もなくハンコックが踏み込んだ。

一気に男の懐に飛び込み、白い美脚が跳ね上がる。

見事な上段蹴りで男の顎を横つ面からひっぱたき、脳を揺らして地に転がす。

そのまま起き上がる前に顔を踏み付け、サッカーボールキックで側頭部を強撃。

うめき声すら上げずに男は昏倒した。

この間僅か十秒足らず。惚れ惚れするような鮮やかさだ。

「正しく、言葉通り……九蛇の戦士か。大したもんだ」

彼女等がさらわれたシチュエーションはファウストの知る所でないが、そもそもハンコックは現時点で九蛇の海賊船に乗ることを許されている実力者。油断した男の一人位は手錠付きでも余裕と言う訳である。

思わず口笛の一つも吹きたくなるファウストであるが、男達はそうはいかない。

一瞬、ほうけたように倒れた男とハンコックを見比べ……瞬時に彼等の顔に憤怒が浮かんだ。



「この、ガキいっ！」

怒りのままにハンコックにつかみ掛かろうとするが、九蛇にそんなものが通用する訳が無い。

身長差を生かして真上から押し潰そうとするかのように襲い掛かる男をしゃがんでかい潜り、その次に別の男が捕まえようと伸ばした手を逆に掴み返し、捻りあげ、

「はっ！」

ゴキンッ！

ハンコックが気合いを入れると良い音がして、男の肩が外れた。

「ウギヤアア……グヘッ!？」

肩を押さえて悲鳴を上げようとした男だが、それすら叶わずにハンコックが思い切り股間を蹴撃。

肩を外された泡を吹いてノックアウトした。

部屋に入って来た男は四人。

瞬く間に二人をのされた、残りの二人は、微妙に内股になりつつハンコックから後ずさった。

ハンコックは泰然とその二人を見下ろす。

身長差など問題ではない。

人さらい二人とハンコックでは、魂の強さが違いすぎた。

「う、ああ……！」

「ひっ、ひいい……！」

情けない悲鳴を上げ、逃げようとする人さらい達。

その選択自体は正しいものだったが……それを成す事は出来なかった。

「逃さぬ！」

そう言いつつも、ハンコックは二人を追わなかった。

ただ、その場に立って強く二人を睨んだだけ。

「ウツ……！」

それだけで、二人は泡を吹いて気絶した。

しかし、この時ハンコックは最初に気絶させた男二人に背を向けて立っていた。

彼女が大人だったならば、何の問題も無かったことだが、今回はそれがあだとなった。

子供の一撃では威力不足だったのか、一番最初に気絶させた男が起き上がり、サンダーソニアとマリーゴールドに向かって走り出したのだ。

「ハンコック！妹を見る！」

ファウストが叫びつつ、何とか二人と男の間に体を差し込む。

「どけえ！」

「ぐあつ！」

だが、海楼石付きの子供が男を阻める訳もなく、

「グへへへッ。さあ、大人しくしな」

「外道が……！」

悔しさに齒軋りするハンコツクの前で、恐怖に固まる二人にナイフを突き付けた男が勝ち誇った顔でハンコツクを見ていた。

「ね、姉様、私達は気にしないで！」

「男をやつつけて下さい！」

そう、恐怖に震えながらも妹二人は叫ぶが、当然ハンコツクがその言葉を聞けるはずもなく……。

結果、ハンコツクは手枷に加えて足枷までつけられて部屋に乱暴に転がされた。

「この、卑怯者め……」

口を開くも、その言葉は弱々しい。

枷を付ける際にも揉めたらしく、九蛇の露出の高めの衣装から除く肌には、いくつかの痣が出来ていた。

「このクソガキ！まだ何か言う元気があるのか！」

「……ふん」

しかし、それでも彼女の視線は強く、彼女の心は屈しない。  
だが……。

「そうかよ。だったら……」

男達が取った行動は、今のハンコックの弱点を容赦無くえぐるものだった。

先程気絶させられた三番目と四番目がおもむろにハンコックから離れ、それぞれサンダーソニアとマリーゴールドのそばに行き、ドカツ！と靴底で二人の腹を蹴飛ばした。

「ぐはっ！……つぶ！……げえっ！げほっ、ごほっ！」

腹を蹴られ、うずくまった二人が、胃の中のを逆流させるのを見て、ハンコックが瞬時に激昂する。

「貴様ツ！」

「おっと、わかってんだろ？動くな」

「……っ！」

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる一番目と二番目が、復讐しようとしてハンコックに腕を振りかぶった。

「くっ！」

思わず目をつぶるハンコック。だが、予想した衝撃は来なかった。

不思議に思っただけ目を開ければ、自らの前には腹に二人の男の拳を埋め込ませたファウストがうずくまっていた。

「お、お前っ!?!」

驚愕するハンコック。

ファウストは彼女の方を向かず、腹を押さえながら男達を見据えた。

「げほっ。……もうここらで良いだろう。十分溜飲は下がったはずだぞ」

「てめえが指図してんじゃねえ、殺されてえのか!」

ハンコックを殴れなかったのが不快だったのか、青筋を浮かべる男達。

しかしファウストは怯まない。この程度、あの島の猛獣達に比べれば無いも同然のプレッシャーだった。

「やれるものならやってみろ、その瞬間お前達の死が確定するぞ。それに、商品を殴って価値を下げてどうする気なんだ?」

「くっ……」

「これだから低脳は……。自らの行いすら律することが出来ずに良く今まで生きていられたものだ」

はっきりとした侮蔑の言葉と態度に、男達がいきり立つ。

「黙れっ!」

男の一人が蹴りをファウストに叩き込み、衝撃に体を折り曲げたファウストの髪を掴み、至近距離で睨みつける。

「おい、知ってるかガキ。生意気な商品の躰も、俺達の立派な仕事なんだよ」

「ぐっ……うるせえ、顔を近付けんな。くせえしきたねえんだよ」

「ガキ……よほど厳しい躰が好みらしいな！……この部屋じゃマズいな。おいてめえら、行くぞ、仕事だ」

男達は最早ハンコックは眼中に無いらしく、髪を捕んでファウストを引きずっていく。

(……逃げるのには失敗したが、これ以上ソニアとマリーが傷つくのは避けられたようじゃ……。しかし、いったいあの青い髪の男は何がしたかったんじゃ？わざわざ私を庇うような真似をして、奴らを煽って……)

ファウストが何故自分達を庇うような行動をしたのかわからずに首を捻る、ハンコックの視線が、連れ去られるファウストとかちあった。

その瞬間、ファウストはハンコックに向けて口元を軽く歪めて見せた。

(っ！?)

笑みを浮かべたままのファウストを連れられたまま男達が去り、部屋に

静寂が訪れる。

「な、何だか良くわからないけど、あの男が変な事をしたお陰で助かりましたね。姉様」

「マリーの言う通りね、一時はどうなるかと……姉様？」

「ん？あ、ああ……そうじゃな。（あやつ、私達を助けるために？ただの男が、どうして……いや、今はその事よりも二人の体の事じや）二人とも、蹴られた所は大丈夫か？」

「はい、私達も九蛇ですから」

それを聞いた瞬間、ハンコックの限界近くまで張り詰めていた緊張の糸が、プツツリと切れた。

「そう、か。……良かった……」

「「姉様っ!？」」

それだけ言って、ハンコックは床に倒れ込んだ。

「これに懲りたら、もう生意気な口をきかねえ事だな！」

ファウストが連れ去られてから二時間後。リンチを終えた男達が部屋にファウストを放り出し、去っていった。

ファウストは、ボロボロだった。服で隠せる腹部には痛々しい痣が数え切れないほど着いており、服で隠せない部分にしても、腹程では無いにしろ傷だらけだった。

「いてえ……」

全身を打撲の痛みが苛む。だが、ファウストはこの結果に満足していた。

自分があそこで挑発したお陰で、ハンコック達への被害は最小限ですんだ。

別に、感謝が欲しくて助けた訳ではない。出来たら世間話ができる位に関係を改善出来たら良いという打算もあったし、何よりファウストの行動の大本は、女の子が傷つくのは見たくないという単純な自己満足のなのだから。

（あれ、ハンコックは……ヤバイ）

ふと、部屋に入ったのにハンコックの苛烈な視線を感じないことが気になって回りを見て見れば、ハンコックは部屋の隅で死んだように横たわっていた。

顔色は青白く、呼吸は浅い。どうかんがえても良い状態とは思えなかった。

ヨロヨロとハンコックに近寄ると弾かれたように二人の妹が反応した。

「寄るな、男！」



「姉様に指一本触れてみる、殺してやる！」

敵意を剥き出し威嚇する二人に頓着せず、ファウストはハンコックに近寄っていく。

「止ま、いいのじゃ、ソニア。その男と少し話がしたい」……姉様っ!？」

青白い顔のまま体を起こしたハンコックが、二人の妹に言う。

「ソニア、マリー、少し離れていてくれんか」

「姉様、でも……!」

「危険です!相手は男ですよ!？」

「わかっておる。でも、頼む」

「わかりました、そこまで言うのなら……」

渋谷部屋の反対側に行く二人を見てからファウストはハンコックのすぐそばに腰を下ろした。

そして、内心で愕然とした。

ハンコックの体は遠目で見ると見ても遥かに細く、はかなげで、この少女が先程の大立ち回りを演じたなんて信じられなかった。

加えて、顔色は悪く、座っているだけでも辛そうにしているのがわかる。

しかし、それを隠そうと背筋を伸ばして真っ直ぐな視線で自分を見るハンコックに、ファウストは尊敬の念すら抱きかけていた。

弱さを見せまいとする彼女の姿勢は美しい。だが、今は傍目にも明

らかに無茶をしているとわかる。  
だから、ファウストはハンコックが口を開く前に懐から小さな赤い木の実を取り出した。

「……なんじゃ、それは」

「取って置き、滋養強壮や精神安定の効果がある木の実だ。クコの実って呼んでるんだが……服の内ポケットにあったから奪われずにすんだ。さあ食べ」

因みに、その実の本当の名前はファウストも知らない。

ただ、昔たまたま見付けたこの実が昔のマンガ関連の記憶にある木の実に似ていたためそう呼んでいるのである。

「い、いらぬ。というか、何を急に……」

「いいから、食べ。食って寝ろ。話は色々あるだろうが、まずは体を回復させないとどうにもならんぞ」

「べ、別に私は疲れてなど……」

「嘘をつけ。あと、もしかして俺が騙して毒でも盛るって考えてるか？」

逡巡するハンコックの目の前でファウストは木の実のいくつかを口に放り込む。

木の実を咀嚼しながら、ファウストは更にまくし立てた。

「これで良いだろ。まだお前は子供なんだ、今はただ寝ろ。自分の

体がヤバイ事くらいわかってるだろ？それに、お前が倒れたら誰があの二人を守るんだ？」

「っ！！」

有無を言わせずハンコックの細い手にクコの実を握らせ、肩を軽く押した。

それだけでハンコックは体を支えられず、毛布に横たえられてしま

う。それで諦めたのか、横たわったままハンコックが真剣な顔で質問した。

「……………わかった、今は休もう。だが、何故お前はこつも私達を助けようとするのだ？」

そう聞かれたファウストは、酷く複雑な顔をした。

実際のところ、理由はと聞かれれば色々とあるのだ。

原作で好きなキャラだったというのもその一つだろうし、実際に会ってその在り方に好感を持てたということもあれば、自分のせいで余計なストレスを与えてしまったため、その詫びという意味もある。

だがまあ、結局の所は何かと言えば。

「……………ただの自己満足だよ。あと、俺は男じゃない、ファウストって名前がある」

それだけ言っただけでファウストは拍子抜けしたような顔をしたハンコックに背を向け、元の部屋の隅に戻り、ハンコックに背を向けてうづくまっした。

「……おかしな奴。男にも色々な奴がいるんじゃない」

群青の髪を持った男の背を見てから、ハンコックは手に握らされたクコの実に視線を落とした。

最初は、他の男同様に彼を警戒していた。しかし、他に比べてずいぶん小さい彼は、睨みつけても困ったような顔で視線をそらすだけ。害はないと見たが、それでも安心出来ずにいると、何故か申し訳なさそうな目でこちらを見てくるようになった。

それから、さっきの出来事。

なんの関係も無い自分を庇って、その身に拳を受けても立つ男。ファウストの背中では、今思うと何故かその体よりも遙かに大きく見えて………。

「あの……姉様、どうしたのですか、顔が赤いですよ？……ハッ！まさか、あの男が何か！」

「えっ！？い、いや何でもないのじゃ！ファウストの事など考えておらん！」

「ファウスト？あの男ですか？」

「あゝ、ええつと……その……とっ、とにかく何でもないのじゃ。もう寝るっ！」

「あ、姉様！？」

真っ赤になった顔を隠すように頭から毛布を引つ被ってしまったハンコックに、妹二人は首を傾げるしか無いのであった。

### 第三話〜イベントは親愛への第一歩〜（後書き）

PV12000オーバー

ユニークアクセス2000オーバー

ヒヤッハアアアアアア！！！！

……失礼、取り乱しました。

でも思わず奇声を上げるくらい嬉しかったです。

読者の皆様、こんな駄文を読んでくださってありがとうございます。

まだ四話ですけど、これからもよろしくお願いします。

では。

#### 第四話〜強さの理由〜（前書き）

すみません、遅くなりました！

今回は難産でした……。

初めての挑戦な、自分では恋愛パートだと考えているお話です。

いや、恋愛ってよりはまだ友情でしょうか？

では、ごっご。

#### 第四話〜強さの理由〜

クコの実の一件から、三日が経過した日の深夜。

眠っていたが空腹で目の覚めたファウストは妙な音　押し殺してくぐもったような……しかし確かな泣き声を聞き取った。不審に思って周りを見渡してみると、原因はすぐに見つかった。

「……ハンコック？」

この三日で、ハンコック等とファウストの関係は、かなりの改善を見せていた。

サンダーソニアとマリーゴールドもファウストに怯えることは無くなり、ハンコックとも雑談を交わす位には親しくなれた。

そのハンコックが、熟睡する二人の妹と自分から最も離れた部屋の隅で一人毛布を被って震えていたのだ。

「ど、どうしてそなたがこんな時間に起きて……!!」

狼狽するハンコックの声は鼻声で、目は真っ赤に充血していた。明らかに泣いていたとわかる様子である。

「……なあ、ハンコック」

「な、何じゃ」

「きっかけは何だ？」

近寄って囁かれたファウストの言葉を聞いてハンコックは少し驚いた顔をする。

「理由を、きかんのか」

「聞かなくてもわかる。今の状況なら夜泣くくらいは普通だからな。でも、お前は強い。きっかけ無しにそうはならんだろう」

それを聞いて暫し逡巡していたハンコックだが、余程堪えていたのか、毛布を抱えたままポツリポツリと話しはじめた。

彼女がこうして泣くのはこれが初めてではないらしい。

前から何度も悪夢を見て夜中に目が覚めてしまい、そうするとその気は無くても普段は考えないようなネガティブな事を考えてしまい、堪えようとしても泣いてしまうのだ。

と、多分の自嘲を含んだ声でハンコックが喋った。

「笑ってくれ……情けないとは分かっているけど、そうになると涙が止められないのじゃ。……ソニアとマリーにはいつも強く誇り高い九蛇の戦士たれといつも言っておるのに、私は……」

涙と悔しさを滲ませるハンコックを見た瞬間、ファウストはクコの事で彼女に抱いた印象が間違っていないことを確信した。

強靭だが、柔軟性は少ない。今の時点でさえ危ういのだ。しかも、本来ならば今の彼女の様に泣くことは精神を安定させるための本能的な行動なのだが、強さを信じる九蛇であるハンコックはそうやって泣いてしまう自らを責め、結果余計にストレスを溜め込んでいる。このまま行けば、この十二歳の少女がいずれポキンと折れてしまう



ことは明白だった。

それを回避するために今自分に出来ることは、と考え……ファウス  
トは若干躊躇いつつも俯いて動かないハンコックに近付いて、彼女  
の肩にそつと手を置いた。

「なあ、ハンコック。泣く、つてのはそんなに悪いことか？」

「……どういっ、事じゃ」

「（うおっ！や、ヤバイ……！）……い、いや言葉通りの意味だ」  
涙目+上目遣いという最強コンボに熱き血潮が逆流しそうになるも  
のの何とか堪え、話を続けるファウスト。

「別に泣いたって良いだろう。九蛇であってもお前はまだまだ十  
二歳の女の子なんだぞ？」

「……ファウスト、お主は私をバカにしておるのか？私は九蛇の戦  
士じゃ。その私が無様に泣くなど許されることでは……」

「だから、九蛇の戦士だ何て今は関係ないんだ。そもそも、こんな  
状況でお前みたいな年齢の子が完璧に冷静さを保ったままでいられ  
る方がどうかしてる。だから、お前は泣いて良いんだ」

「だ、だが私は！私は……九蛇の戦士で、ソニアとマリーを守らな  
きゃいけない……」

狼狽しつつも、まるで呪文の如くに何度も九蛇の戦士だということ  
を繰り返すハンコック。

恐らくは、それと二人の妹の存在が彼女の今の現状の最大の要因な

のだろう。二人の姉であり、九蛇の戦士であるということはハンコックを支えもしているが、同時に使命感の様な物で彼女を縛ってもいた。

だが、四六時中それでは、人は持たない。人間がちゃんと活動するためには適度な息抜きが必要なのだ。

最初は、自分を敵でないと認識させれば大丈夫だと考えていたが、それでは足りないのだと気付かされた。

故に、ファウストは今だけハンコックの鞭を取り払おうとしていた。ひたすら強くあるうとする彼女が少しでも自らの弱さを認め、納得して泣くために。

「ハンコック。俺は今のお前に泣いていいって言ってるんだ。ソニアとマリーの姉でもなく、九蛇の戦士でもない今のお前にな」

「な、何を……私は、何時でも二人の姉で、九蛇の「違うな、今は絶対に違う」……っ！」

「二人は寝ているし、此処にはお前を傷つける男は存在しない。……だから、俺は何度でも言うぞ、ハンコック。お前は今、泣いて良いんだ」

ファウストがそう言ったとたん、ハンコックの目に溜まっていた涙が決壊した。

「……っ!!」

顔を毛布に埋め、体を震わせながら、しかし声は上げずにハンコックは泣いた。その姿だけは先程と余り大差は無かったが、唯一の違

いは彼女が泣き止もうとしていないことだ。

ふう、一応何とかかなりはしたかな？……あんまりじろじろ見られたい物でも無いだろうし、俺は戻っておくか。そう思ったファウストはハンコックに背を向けて離れようとするが、ふと抵抗を感じて背後を見ればハンコックが服の裾を掴んでいた。

「……………わかった」

その行動の意味を問わねば理解できないほどに鈍くは無いファウストは、ハンコックの隣に腰を降ろした。

は、いいが、ファウストに出来たのはそれが限界だった。

これまでは、何とかしなければならぬという考えで一杯だったために意識しなかったが、今は違う。

深夜に超美人な女の子と二人つきり。しかもその子は自らが泣かしたも同然で、彼我の距離は僅かに三十センチ。

(さて……………此処からどうすれば良いんだ……………)

普通の会話くらいならばともかく、こんな時のやり方なんて分からないファウストは色々と考えた末、一番リスクの少ない方法を取ることにした。

つまり、何もしない。

ただ隣に座るだけ。頭撫でたりだとか、背中さすったりだとかしそうになったが、結局はなにもしなかった。

(これで良いはずだ、うん。隣に居るってことが大事なんだ、多分)

しゃくりあげながらも若干ハンコックが不満げなオーラを出すものの、ファウストはそれに気付かずにはたした事を考えながら、ハンコックの隣にただ座っているのだった。

それから少し時間が経って、ハンコックが泣き疲れたため座ったまままで眠ってしまい、帰ろうとしたファウストだが、問題があった。

（服……掴まれたままだな）

しかも、かなりがっちり。

海楼石のせいで自分では外すことすら出来ず、しょうがなくハンコックの隣で壁にもたれて寝ようとして、

（ううおおおおっ!!??）

体勢を崩したハンコックが、ファウストの方にコテンと倒れ込んで来たのだ。

結果どうなったかと言えば、俗に言うひざ枕である。もっとも、一般的な物とは男女逆だったりする訳だが。

（妙な感じになっちまったが……まあ、良いか）

自分の膝を枕に眠るハンコックの寝顔は年相応に　いや、最高に愛らしく……つい、彼女の頭に手を置き、撫でてしまった。

（おお、柔らかい。それに良い感触だなあ）

商品であるハンコック達はシャワーの使用を許されているため、絹

糸以上の柔らかさと感触を保っているハンコックの艶やかな髪  
の感触を感じつつ、ファウストはこれからの彼女等に考えを馳せた。

天竜人の奴隷となり、その後誰かに助け出されるまでに彼女等は  
心に深い傷を負うことになる。

死ぬことは無いとはいえ、許せることではない……が、今の自分  
は何も出来ない事に胃がよじれる思いのファウストだったが、彼は  
気付いていなかった。

彼女等が『死ぬことは無い』と考えることの危険性に。もうファウ  
ストはとつくに、此処はワンピースの世界であると同時に、現実で  
あるとも認識している……と自分では考えていた。

しかし、彼の無意識下では、まだ何処かにマンガとしてのワンピ  
ースが根深く居着いていたのだ。

だからこそ、ファウストは自らはともかく、原作からハンコック達  
は奴隷として受ける屈辱的な仕打ちを除けば、死ぬようなことには  
なるまいと考えたのだ。

だからこの時のファウストは、心の何処かで『自分が何も出来無く  
とも原作での出来事がいつか起こって、ハンコック達は奴隷から逃  
れられるだろう』といった甘っちょろい幻想を抱いていた。

それがどれだけ希望的観測に基づいた事なのかを、自覚することす  
らなく。

結局、その考えの危うさを自覚できないまま思考を打ち切り、ハン  
コックの頭を膝に載せたまま、ファウストは目を閉じた。

(結局、なるようにしかならない……か。……このままじゃ明日確  
実に大変な事になるけど、まあこれもなるようになるか)

寝る間際のファウストの予想通り、翌朝ひざ枕をしているファウス  
トとされているハンコックをサンダーソニアとマリーゴールドに目  
撃され、かなりの波乱があったりするのだが……。

それはまた、別の話である。

#### 第四話、強さの理由（後書き）

いかがだったでしょうか。色々違和感無く書けてると良いんですが……。

感想、ご意見等、お待ちしております！

第五話〜孤独の結果〜（前書き）

書きたいことは決まっているのに、上手く文章に起こせません……。

文才が欲しいと切に思う今日この頃です。

2月6日内容を追加しました。



## 第五話 孤独の結果

シャボンディ諸島。

それは、偉大なる航路前半グランドラインと偉大なる航路後半レットラインとを分かつ赤土の大陸の前に存在する、79本のヤルキマン・マングローブで構成された街。

それぞれの樹には番号がふっており、それで場所が確認出来るようになっていいる。

ファウスト達を載せた船が到着したのは1番MGに存在する海軍言うところの職業安定所 王下七武海の一部、ドフラミンゴが経営するヒューマンシヨップである。

そこでは連日貴族や金持ち相手に様々な商品にんげんが売られていく……800年の歴史が積み上げた澱の様な場所だ。

『さあさあ、本日も掘り出し物が揃っております！まずはこの人、元海賊団船長……』

そこでファウスト達は仲介業者に売り払われ、身綺麗にさせられてから他の奴隷候補達と一緒に檻に入れられた。

そこでは支配人ディスコの拡声器越しの声と、それに負けない熱気を持った買い手達の喧騒が聞こえて来る。時間が経つに連れ檻の中の人物は商品となるため連れていかれ減って行き、次は我が身と皆が顔を青くしていた。

「……のう、ファウスト。ここは聖地マリージョアの近くなのじゃろう？どうして海軍は何もしないのじゃ？」

そんな中、ふと気付いたことを質問するハンコック。サンダーソニアとマリーゴールドも同じ疑問の顔をしている。確かに、仕組みを知らねば分からないだろう。

「知ってるさ。でも、彼等は手出し出来ない。しないんじゃないかな。800年前に世界政府を作り上げた20人の王達……天竜人がそれを続けているからな」

「そんな……」

淡々としたファウストの答えに、ショックを受けるハンコック達。

幾ら九蛇の敵である海軍の事とは言え、仮にも堂々と正義を掲げる集団がこんな非人道的なことを見過ごしているのは驚きらしい。

「なあ、ハンコック」

「ん……何じゃ？」

「……これから俺達には、多分死んだ方がマシだって思えるくらい、辛いことが待ってる」

「っ！……ファウスト！言い方と言うものが有るじゃろう！」

ファウストの突然の宣告に、サンダーソニアとマリーゴールドは愚か、同じ檻に入れられている全員の顔色が悪くなった。

「でも、事実だ。それでも、一つ約束して欲しいことが有る」

「……何じゃ？」

「絶対に死のうと考えるな、って事だ。辛くても、死にたくなっても、どれだけ屈辱を受けても、絶対に死ぬな。みっともなくたっていいから、ただ生きる。そうすれば、何時か絶対に希望が表れる」

「……根拠は、有るのか？」

「いや、無い。強いて言えば、折角出来た友人に簡単に死んで貰いたくないだけだ」

これはファウストの本心であるし、同時に何時か誰かがハンコック達を助けるということを知っているからこそその発言である。

そして、ファウストの全く答えになっていない返事を聞いたハンコックは鈴の転がるような音で笑う。

「アハハハツ……ファウスト、お主は本当におかしな奴じゃな。言っておることは出鱈目なのに、何故だか信じてみたくなる……」

「……ハンコック」

そう言っつてハンコックが浮かべたの柔らかい笑顔に、ファウストを含めた檻の中の人々が見惚れる中、

「おい！番号103、104、105！出番だ、舞台に出ろ！」

無粋なヒューマンショップの店員の声が響いた。

「もう、時間か。ソニア、マリー。覚悟は決めたか？」

「「ハイ、姉様！」」

二人の妹は先程までの怯えが嘘のように引き締まった顔をして答え、ハンコック達は誇り高き九蛇として最悪な舞台に上がるうとする。

先程はただ死ぬな。などと口にしたものの、結局は死地に向かう彼女等を見送るしか出来ないファウストの内心は、無力感と恐怖で荒れ狂っていた。

自分がサルトルと会った時に油断しなければ、そこで彼女等は助けられた。海楼石と爆弾付きの首輪さえ無ければ、今からでも救い出せる。

そして、もし。

いくらいずれ救われる事は確定していても、万が一、億が一。彼女等が何らかのイレギュラーで死んでしまったら。

俺は、また一人になる。この広い広い世界で、たった一人……。

(……………っ！)

考えただけで、全身に悪寒が走る。

『たれば』に意味は無く、今は考えるだけ無駄だと知りつつも、最悪を考えずには居られなかった。

そして、そんなファウストの苦悩を読み取ったのか、ファウストを励ます様にハンコックが言葉を紡ぐ。

「……………ファウスト。私たちは大丈夫じゃ。三人ならば、どんな逆境も乗り越えられる。約束も守ると誓おう。九蛇の誇りにかけて」

「……………ああ。分かってる」

情けねえ、本来ハンコックに気を遣うべき俺が、逆に気を遣われちまうなんてな。

唯一出来た友人達としばらくの別れになるというのに、気の利いた言葉一つ送れないことを不甲斐無く思うファウスト。そうこうしているうちに、ヒューマンショップの店員が苛立った顔でこちらに近付いて来るのが視界の端に捕らえられた。

「ファウスト、最後にこれだけは言っておく……絶対に、生きてまた会おう」

それを確認したハンコックは笑みを浮かべてそれだけ言うと、ファウストに背を向け、堂々と舞台へ向かって行った。

「ハハハッ……全く、蛇姫様はカッコイイねえ……。この状況じゃ、俺にはあんな顔はとても出来ねえや……」それを見送りながらポツリと放たれたファウストは自嘲の籠った呟きは、舞台から響いて来る喚声に掻き消され、誰の耳にも入ることなく消えて行くのだった。

ヒューマンショップには最近、良く顔を見せるお得意の天竜人がいた。

名を、シャルロス・ロズワード。

『原作』には存在しない、シャルロスとシャルリア宮の弟であり、神の手によってワンピースの世界に降り立った転生者の一人であっ

た。

（年代的に、そろそろハンコックが売りに出される筈……フヒヒ……今はまだ美幼女だけど、何年か経ったら超絶巨乳美女になるのは確定だし、ハーレムがまた増えるなWWWあとは、フィッシャー・タイガーと悪魔の実にさえ気をつけたら逃げ出されることも無いだろうし、目指せ調教ルートって事でWWW）

最低な事を臆面もなく考えて、だらし無く顔をにやけさせつつ、シヤルロスはポーツとヒューマンシヨップのやり取りを珍しく付いてきた家族と一緒に眺めていた。

しかし、ハンコックが売りに出される正確な時期は分からないため足しげくオークションに通って居たのだがいい加減それにも飽きて転生時の事に思いを馳せていた。

前世の死は鉄骨が自分の真上に落ちてきた事による事故死なのだが、そこから幾度と無くファンフィクション作品で見たテンプレ展開が自身に起こったことに最初は狂喜乱舞した。

しかし唯一テンプレと違ったことは、所謂最強転生オリ主になれなかった事である。

それどころかバランス調整と言う名目で、自分は何の力も貰えなかった。

しかし、力は無かったが、身分チートが自分には備わっていた。

たった20人の王族の末裔である天竜人に成れたのだから、何も文句は無かった。

むしろ、作り上げたハーレムに大満足していたりする。

『……さて！お次はこちらだ！あのカームベルトにある女カ島出身で、滅多に外海と接触を持たない事で有名な女だけの海賊団、九蛇の幼い姉妹だあーっ！今なら三人セットで100万ベリーから！』  
それを聞いた瞬間、シャルロスが動いた。

「一千万で買うえ〜！一千万ベリー〜ッ！！」

シャルロスの放った鶴の一声に、会場が静まり返った。

（フヒヒ、空気読まなくてサーセンWWつか、これって原作のケイミーの時の再現だろWWWやっぱ金の力ってパネエWWW）

『い、いらっしやいませんか、一千万ベリー以上の方……』

計画の成功を確信したシャルロスだったが、ここで予想外の出来事が起こった。

「一千五百万だすえ〜！」

そう、彼の隣に立つれっきとした兄……シャルロスである。  
どうやら、ハンコック達を気に入ってしまったらしい。

「（シャルロスてめえ、空気読めWWだからルフィに制裁されんだよ！）だったら、こっちは三千万だえ〜！」

「シャルロスがそうするなら、こっちは五千万だえ〜！」

そんな調子で兄弟で値段を吊り上げていく様子は流石に良くないと

思ったのか、ハンコック達の値段が驚異の一億ベリーを突破した辺りで、彼等の父親　ロスワード聖が仲裁に入った。

「いい加減にしないか、お前達。シャルロス、お前は兄なんだ。此処はシャルロスに譲ってやりなさい。後で何か埋め合わせはするか」

「む、御父上様がそう言うなら、仕方ないえ」

(うはWW御父上様マジGJWWW)

家長であるロスワード聖の言葉にシャルロスはあっさり引き下がり、シャルロスが内心で大喜びする。

『で、では九蛇の三姉妹は、シャルロス様が一億ベリーで落札されました!』

目当てのものが手に入り、ほぼオークションに興味を無くしかけていたシャルロスだが、それからしばらくしてのディスクの言葉を聞いて、再度舞台に目を向けた。

『さて、それではいよいよ本日の目玉商品でございます!これまでその存在ばかりが噂され、決して表に出ることの無かった幻……それが今、皆様の前に現れますっ!!悪魔の実、『動物系』の中でも珍しい幻獣種をも越える、最も珍しい悪魔の実……神獣種的能力者ダアーツ!!!!!!』



『……者タアーツ！！！！』

「反吐が出るな……」

司会の宣言と共に檻ごと舞台に運ばれたファウストの、まず第一声がそれだった。

「これは、何だったか……そう、『人間の腐ったにおい』だ。全くもってその通り……誰かが言ったかは忘れたけど真理を突いてる」

ファウストを見詰める人々の、目、眼、瞳、め。

どれ一つの例外もなく歪んだ欲望で濁りきっていた。

(いや、あいつらは違うな……)

ファウストがそう断じたのは、会場の中央に陣取る、白い服に逆さにした金魚鉢をかぶった様な恰好をして、周囲に首輪を付けた人間を従えている連中 天竜人。

他の人間が大なり小なりこの事を普通ではないと考えているのに対して、彼等だけはこの事態を……人が売り買いされるこの非常識を、極当然として受け取っている。

(故に、これ程の事を平然とする彼等の目には濁りが無い。これも誰だったか……『悪意のある分海賊達しじはんの方がまだマシだ』だったか？)

彼等にあるのは、ただ子供のように純粹な、800年分もの間に汚

れきった欲望のみ。

(……………まあ、いい。それよりも今の状況か。海楼石の枷は無し、四方は海楼石の檻、首には爆弾の首輪。こちらに向けられてるのはは会場中からの注目と、恐らく捕縛弾の銃口。……………でも、一瞬それさえ何とかなれば……………)

「……………い！おい、爆破されてえのか！能力を使うんだよ！」

舞台上に運ばれてから、ファウストは天竜人をぼうつと眺めながら状況判断に努めていたが、ようやく売り手が苛立った様子で自分に怒鳴っている事に気付いて、

「……………わかった」

思考を中断し、暫し逡巡してから、ファウストは実の力を発動させた。

と言っても彼がいるのは一辺二十メートルの海楼石入りの檻の中。故に、彼は半人半獣の姿を取った。

体が一瞬で長く伸び、髪と同じ群青色の鱗が肌色の皮膚に成り代わる。

その体長は十メートル前後。下半身は蛇となり、上半身は鱗を付けた人型。頭部は蛇と人を足して割ったような見た目に。

ざわざわと、どよめく会場。

悪魔の実ならばこれくらいは有りだ、と考える一方、自分達よりも遥かに小さい子供がここまで巨大な化け物になったことに驚きを禁

じ得ないらしい。

『皆様！これが神獣種であります！ご覧下さい、まだ実を食べた本人は子供だと言うのに、この雄々しさ！この奴隷を持てば、闘技<sup>アリーナ</sup>場で相当の上位に立てることでしょう、優勝とて夢ではありません！！！さあ、こんな彼は、時価三億ベリーからです！！』

(闘技場<sup>アリーナ</sup>つてのが何なのかは知らないが、随分高いんだな、俺……。まあ、仮にも神に貰った力だけはあるってことか)

自らに付けられた値段に驚くファウストだが、無理も無い。何せ一人で、人魚四人以上の値段である。

もつともファウストが更に驚いたのは、バイヤーの全員が買う気満々で彼を見ていることだが。

「十億ベリーで買うえ〜！十億ベリー〜っ！！」

だが、バイヤー達の緊張も、その一言でまたも台なしになった。

言ったのは、言わずと知れた天竜人。

ファウストは知らぬ事だが、ハンコック達を買い取り、また転生者でもあるシャルロスの声である。

会場がシンとなり、視線がファウストからシャルロスに移った瞬間。

(残念だが、俺は黙って奴隷にならんっ！！)

ファウストが動いた。体を猛烈に回転させ、尻尾の先端を使ってドリルの様に唯一海楼石でない床を貫いた。

『ああっ、ど、奴隷が逃げるぞ!!』

そのまま会場に響く声を後にしながら、大地を作る木の根にまで到達し会場からの脱出に成功した。

「よし……!!」

ある程度掘り進んでから変身を解除し、根っこの内部の空間に身を差し込むようにして、オークション会場から更に遠ざかる。

「パフォーマンスのために海楼石を体から外されてから直ぐに考えついた事だが、上手くいった……か」  
ちよつと足を滑らせると眼下の海に真つ逆さまだが、そんなへまをするようなファウストではない。

因みに、首輪は今だ付いたままである。  
どうするかと言つと……。

「生命帰還……紙絵武身」

【鎧鱗】

生命帰還とは、原作CP9が扱った技の一つである。その概要は、体の隅々まで意識を行き渡らせ、全身を 例えば髪の毛さえ、意のままに操るといったもの。

それを動物系の悪魔の実の能力者が行えば、どうなるか。

まず全身に、群青の鱗が生えだした。ここまでは先程と変わらないが、違いは此処からだ。

体のサイズは大きくならず、足も普通のまま。代わりに腰の後ろから長い尻尾が生え、鱗はどんどん密度を濃くして甲殻となり、それが折り重なってまるで群青の全身鎧を着ているような見た目になった。

これが、ファウストが長い修練の末にたどり着いた生命帰還のバリエーションの一つである。

しかしながら今だ未熟のために余り長い間の持続は不可能なのだが、今はこの一瞬が大事なのだ。加えて、

「鉄壊 【剛】！」

体の防御力を向上させる体技 鉄壊を発動させる。  
その直後。

ドカンッ！！

奴隷の証である爆弾付きの首輪が爆発した。

「ぐ、う……っ！」

流石に全身に鱗を纏った姿で鉄壊を発動させていたと言っても、零距离での爆発ではダメージを喰らう。

いや、こう言うべきか。本来ならば大怪我が普通な零距离での爆発を、『多少のダメージ』で済ませられた、と。

しかし、まずいのはダメージでは無い。今の爆発で、穴から追ってきた連中がファウストに気付いたらしく、忙しない足音が根っこに

響いていた。

だが、ファウストは慌てていなかった。爆発で煤けたままぐいぐいと子供の小さい体を根っこの隙間に通して進み、もうすぐ1番MGを抜けそうになるまで進んでいたのだ。

「大人の体でここまで来るにはそれなりに手間がかかるはず……裏路地にも逃げ込めれば……」

彼の行動は、確かに最善だったろう。

逃げ出すタイミング、爆弾に対する処理、逃走経路、どれをとっても彼に出来る最高だったといっつていい。

「よし。もう、ちょっとで……」

しかし、常に最善を尽くしたとしても上手く行かないのが現実というものなのだ。

『逃げ出している奴隷に次ぐ！もし貴様がこのまま逃げつづけようとするならば、貴様と同じ檻にいた全ての奴隷の首輪を……爆破させる――！』

「……………っ！くそ、読み違えたか……！！」

拡声器越しの無情な声は、ファウストに激震をもたらした。

彼は悔っていたのだ、オークションの支配人達の執念を。

ファウストは、すでに他の人々に売り払われた後ならば、自分が逃

げても最早バイヤーの物となった他の奴隷に害はないと判断した。だからこそ、逃げ出した。

しかし、それは誤りだった。

もし、ハンコック達と話しているところを見られていなかったら。

もし、彼の値段が他の奴隷総てを合わせたよりも高くなかったら。

もし、彼を買おうとしていたのが天竜人で無かったら。

結果は違ったのかも知れない。

『どうやら、嘘だと考えているらしいな……我々が本気だという証拠を聞かせてやろう！』

だが、これが現実だ。

宣言の後、スピーカーから悲鳴と爆音が響いてきた瞬間、ファウス  
トは選択を迫られた。

則ち、

「見捨てて逃げるか、見捨てずに戻るか、ってことか」

この二つの選択である。

（ここで俺が帰らなかったら、あの人達は、殺される。と言っても、そんなのは十中……八、九はブラフ。今の音だって多分誰にも付けない首輪を起爆しただけだ。彼等は商品なんだから。でも……）

確かに、殆どは嘘だろう。しかし、十が一。いや、万が一の確率で、彼等は殺される。そしてそうなった場合、間接的とは言えその引き金を引く事になるのは自分なのだ。

(しかも、ハンコック達もその中、か。……まあでも、これが全く予測できなかった訳じゃない。ハンコック達には悪いけど………っ！)

ファウストが考えを纏めるために予測としてある可能性を考えた瞬間、彼の体中に言いよつた無敵の悪寒が走った。この時ファウストが考えていたのは、敵対していない人々を殺すことなるかもしれないことではなかった。

無論それは避けるべき事だが、ファウストにとっては至上命題という訳ではなかった。

その理由は、ファウストの考え方の基本理念の一つ。

弱肉強食。引いては、それに基づいた現実主義。

それが、8年間の野性の中の生活で自然とファウストの思考回路に根付いたこと。

その、大自然における絶対不変の真理が適用された結果、あそこの奴隷達は存在しているのだ。そこに女子供の区別は無く、只強いものと弱いものに別れるのみ。だから人攫いが悪いのは当然だが、そもそも奴隷になってしまった弱さを持つ彼等自身も、その境遇に同情はするものの、彼等が全く悪く無いとは言えない。

心の何処かでそんなふうにはファウストは考えていた。故に、自分が捕まったときでさえも油断した自分が悪かったのだと考え、憤りつつも冷静さを保っていられた。

だから、ファウストは最初、他の奴隷がどうなるかと見捨てて逃げるつもりだった。

自分が逃げようと、それで他の奴隷がどうにかなる確率は極低かつ



たことも在るし、例え何かがあつて怨嗟の声を呟かれようと、弱いお前達が悪いのだ、そもそも捕まっていなければ自分が逃げて死ぬことにはならなかつただろう、と言つて。

ハンコック達に対しても、さっきの脅しを受けるまでは他と同じ対応をして逃げるつもりだつた。そうする（他人を見捨てる）気が無ければ、そもそもこんなタイミングで逃げ出したりはしない。

だから、自分には他人を踏み台にしても生きる覚悟がある。そう考えていた。

確かに、ファウストは他人は踏み台に出来る類の人間である。今回見捨てるのが、本当に他人だけだつたならば、ファウストは無事に逃げられたのだろうが……。

「……見通しが甘かつた。つて事かよ。……自分の考えすら土壇場にならないと理解できねえつて……」

だがファウストは逃げずに地上に出ると、会場に戻つて行つた。

途端、敵意と恐怖がないまぜになつた視線が注がれる。

マイクを今だ握っているディスクを始めとした売り手側も、まさか本当に戻つて来るとは考えていなかったのか、ポカンとした顔をして。しかし直ぐに残虐さを滲ませた顔で衛兵達に捕縛の指示を下した。

直ぐさま包囲されるファウストが逃げないただ一つの理由。

それは、他の奴隷達と一緒にファウストを驚愕の面持ちで見ているハンコック達三姉妹の存在だつた。

だが、ファウストが彼女等に対して何か特別な感情を抱いている訳では、無かった。

それどころかファウストの中の彼女等は、ただの友人といった所である。ハンコック等が原作キャラであることだって、大して意味は無かった。

何せ出会って一週間も経っていない上、話しはじめたのはもっと最近なのだから、ファウストの判断はまあ妥当である。

ちょっと世話を焼いたのだって、ファウスト的には精神年上の立場から見たハンコックが余りに危うかったのと、普通に話くらいは出来るようになりたいといった打算も含めて口を出したに過ぎないのだ。

ハンコック達から見たファウストはまた別なのかもしれないが、とにかくファウストにとっての彼女等は、『こちらの世界で初めてにして唯一の友人』なのだ。

しかし、出会って間もない友人の、極低い確率での危険のために、弱肉強食を理念と掲げる現実主義者が逃げるチャンスを棒に振るのか？

しかも、今の危険に目をつぶれば結果的にはハンコック達を助けられる事に繋がるといふのに？

答えは、否だ。普通ならば。

では、何故結局彼は逃げずにオークションハウスに戻ったのか？  
その理由は、ハンコック達がいつの間にか自らの想像以上に大切な存在になっただけ……とか、彼女等を見捨てて自分だけ逃げるの

は後味が悪い……みたいな、微笑ましい理由ではない。本当の理由は、先程ハンコック達をオークションの舞台に送るときにもその片鱗を見せていたもの……ファウスト自身にも制御できない、八年間の孤独によってファウストの無意識にまで刻み込まれた呪いにも似た劇的な感情の発露　人との繋がりを失うことに対して生まれる、極度の恐怖心である。

普段のファウストの思考ならば、原作では生き残るのがわかっているキャラで、尚且つ現時点で天竜人の持ち物予定なんだから、例えイレギュラーたる自分が逃げてもかなりの高確率で無事に済むのではないか、と考える。

現に最初はそう考え、ハンコック達をおいていこうとした。

無論、ファウストは現実主義者であっても決して薄情な訳ではない。今回の事も、今自分が逃げられれば、結果的には普通に捕まっているよりもハンコック等を助けられる可能性が上がる、といった事も考えた上での行動だった。

だが、結果として彼女等を助ける行動にも繋がるとは言え、万が一、いや億が一。彼女等が、今自分が逃げるせいで死んでしまったら。先程、ハンコック達を見送るときに考えた最悪の予想が、自分というこの世界における異分子による行動によって成されてしまったら。

脱出の際にはまさかハンコック達を盾にされるとは考えていなかったものの、一度そうなれば、ハンコック達が爆破されるという起こる可能性は極めて低いと思われるビジョンが、何度も何度もファウストの脳裏をよぎり始めたのだ。しかし、これも当然考えられたことであり、最初は彼女等の事は考えずに逃げようとした。

しかし、ファウストは結局恐怖に勝てなかった。

愚かな事だとわかっている。極低い確率の最悪を怖がって行動を止めるなど、度し難い愚か者だ。

しかし、ファウストにはどうしようもなかった。

最悪を考えるだけで身が震え、全身に悪寒が走り出す。

それは長年の孤独が産んだ、失う事に対する無意識レベルでの恐怖

いや、最早恐慌と呼んでもいいものだった。

「まったく、何で戻って来ちまったのかねえ……ああくそ、別にコイビトがいる訳でも無いってのに」

今にも発射されようとしている監獄弾の銃口を眺めながら、ファウストは考える。

「いや。そんなの考えるまでもねえ、か」

そして、直ぐさま自分で結論を下した。

(要は、やっぱり怖いんだよなあ。また一人になるのが……)

もし、今自分が逃げたせいでハンコック達が死んでしまったら。先に感じた最悪の想像が、現実のものとなってしまふ。

加えて、ここで先程ハンコック達を見送るときに感じた物と決定的に違うのは、ファウストの行動によって最悪が発生することである。

天竜人のせいで彼女等が死んでしまふのも勿論恐ろしいが、自分がそれに間接的にも関わる可能性があるのはもっと恐ろしく。そこま

で行かなくとも、もし三人のうち誰かがファウストのせいで傷付けば、残りは確実にファウストとの繋がりを断ち切ろうとするだろう。ファウストが何よりも恐れたのは、実はそれなのかも知れない。

つまり、ファウストの思考を要約すると。

「一人になるのに加えて、嫌われる可能性が怖くて逃げられなかったって……なんって臆病者だよ、俺は……情けねえ……」

そう言っただけで悔しがらるファウストだが、彼を愚かと言っただけは酷だろう。自らの深層心理に何の切っ掛けすらなく気付くのは相応に難しい事なのだ。

捕まる直前、ファウストは考えた。逃げ出す直前に自らの心理に気付けたとして、自分に何が出来ただろうか？

ハンコック達と一緒に連れて逃げる？

無理だ。

確かに実の力を持ち、8年の修練を積んだファウストは、決して弱くはない。

しかし、原作レイリーのように爆弾付きの首輪をどうにかする方法はわからないため、生命帰還と鉄壊で強引に堪え凌いでいるのだ。

当然、ハンコック達はそんなことは出来ないため、連れ出して下手を打てばハンコック達は爆死である。

例え運よく爆弾を回避できても、十二かそこらの少女達を連れて、

脱出出来る具体的な方法の無いシャボンディ諸島を逃げる？

100%無理だろう。

何せ逃げた人物の総金額が十億を突破しているのだ。人攫い達も全力で搜索するだろうから、四人ではとても逃げられない。

では、そもそも一人で逃げずに大人しくしているという選択肢は？

一番の論外である。

そもそも何もしなければ奴隷になってしまっし、何もしなくともハンコック達とは会えなくなる可能性が高いのだ。回避できる可能性がある手段が在るのに、使わない手はない。

ハンコック達が傷つくのは恐ろしいが、何もせず逃げなければただ受け身で不確定な助けが来るのを待つしかない身になってしまうのだ。

つまり、ファウストがしたことは全くの最善。

ただ、億が一にもハンコック達を傷付けられる可能性のある脅しを喰らったのがファウストの運のつきである。

打開するには、単純にファウストが恐怖に勝てば良かっただけなのだが……これは言うほど簡単ではない。

ファウストのこの感情は、高所恐怖症や、暗所恐怖症。あるいは虫嫌いや爬虫類嫌いなどと似た、生理的反応に近いものである。

これを克服するのは、並大抵では無理だ。

酷い高所恐怖症の人間に、そうでない人が『どうして飛行機が怖いんだ？事故の確率は車の方が高いくらいなんだぞ？』と言っても、高所恐怖症の人の台詞の意味はただ一つ『怖いものは怖いのだからしょうがないだろう』である。

ファウストも、それと変わらない。怖いものは、怖いのだ。

その無条件の恐怖を自覚したばかりの人間が、それに抗える訳がなかったのだ。

ファウストだって、頭では分かっていたのだ。

ハンコック達は今の自分ではどうしようもなく、一人で逃げるが最善だと。自分が逃げてても、ハンコック達が傷付く確率は極僅かだと今逃げなければ、ハンコック達は奴隷身分の自分の力ではどうしようもなくなくなってしまおうと。

それだけ考えられるのに、体はファウストの意志を反映せず、自身ですらどうしようもない心の動きがファウストを縛り付け……

「ぐあつ……！」

その結果、ファウストは海楼石の網に捕らえられ、地べたに倒れ伏した。

『この野郎……！奴隷風情が、恥かかせやがって……！』

近寄ってきたディスクが、動けないファウストに足を振り下ろす。普通ならば効くはずも無い一撃だが、海楼石のせいで筋肉を締める事すら難しいファウストには効果的面だった。

「ぐふっ……！ガハッ！」

「てめえはこの程度じゃ済まさねえぞ、売る前に徹底的に調教して……」

踏み付けられ呻きを上げるファウストを、更に痛め付けようとする  
ディスク。

「待つんだえ〜」

しかし、それを止める者がいた。

誰であろう、天竜人の一人にしてハンコック達を買い取ったイレギュ  
ラー……シャルロスである。

「それは、私が買う予定の物だえ〜。それ以上痛めるなら、金を減  
らすえ〜」

「いつ、いえ！滅相もございません！天竜人様の持ち物に手を出そ  
う等とは、決して！！」

「なら、いいんだえ。今度はちゃんと首輪を付けて、活きが良い内  
に家に送っておくんだえ〜」

そう言って、シャルロスはファウストに背を向け、ゆっくりとその  
場を去っていった。

「くそ……結局はこうなるのかよ……」

こうして、ファウストは自らの心に在る伏兵を看破できずに最大の  
チャンス逃し……ハンコック達と同じく天竜人の奴隷となったの  
であった。



## 第五話〜孤独の結果〜（後書き）

PV：45，173アクセス

ユニーク：6，268人

総合評価

266pt

お気に入り登録数

120件

『こんなに評価してもらって大丈夫か？』

『大丈夫じゃない、感激だ』

……… すいません、ネタに走ってしまっくらいに嬉しかったんです。

皆様の期待に答えられるかはわかりませんが、これからも精一杯頑張ってます。

なので、ご意見、感想も待ってます！

遠慮無しに書いてください。

……… 流石に、ただ『面白くない』とか『つまらん』の一言だけで感想されても反応に困るので、出来ればそういうものは止めてくださると幸いです。

## 第五話 奴隷生活・序章 (前書き)

週間アクセスがいつの間にか3000突破しました。  
ありがとうございます。

## 第五話 奴隷生活・序章

ファウスト達のような天竜人に買われた奴隷が先ず始めに連れて来られたのは、マリージョアにある奴隷屋敷だった。

シャルロスの持つ奴隷は基本的にこの屋敷で暮らしているらしい。そして、その屋敷の新たな住人に最初に行われたことは、所有者の刻印……『天駆ける竜の蹄』をその背に刻むこと。

焼ゴテを押し付けられる痛みと恐怖から、悲鳴や啜り泣く声に肉の焼ける臭いが部屋に満ち、そこはさながら地獄の一丁目と言っても過言では無いだろう。

しかも、焼ゴテを持つ者も、悲鳴を上げて逃げようとする奴隷を押しさえるものも、皆一様に恍惚の表情を浮かべている。本物の地獄の獄卒にも劣らぬ迫力だった。

(くそっ！ここには下衆しかいやがらねえ……)

そうしている内にファウストも背中に烙印を押される番になる。

烙印を押し奴隷の調教師たちはファウストが見た目は幼いにも関わらず泣きもしなければ悲鳴も上げないことに不満げだったが、直ぐさま背中にゴテを押し付けた。

(っうー！！……ぐうううう……！)

背中に猛烈な熱が生まれる。

痛みに声が喉まで出かかると、しかし自分達を見て嗤う奴らに対する意地で声を押しさえ込んだ。

その後、実際はほんの僅かなのだろうが、体感時間としては永遠にも感じる時間の後、コテが離された。

その背中にはくつきりと、『天駆ける竜の蹄（人を人以下に見なす証）』が刻まれていた。

勝手に吹き出す汗を拭いつつ周囲を見れば、痛みに途中で気絶するものが大半な中、声すら上げない自分は調教師達の興味を引いたらしい。

「そうか。お前が話に聞いていた例の脱獄未遂か……」

その中から服にラインの入った男が出てきて、ファウストを見下ろした。

歪んだ愉悦に満ちたその目をファウストは真っ直ぐ見返した。

「てめえ！ 奴隷風情が生意気な目をしてんじゃねえ！！」

すると男は鞭を取り出し、ファウストの顔面をひっぱたいた。倒れ込むファウストの背中目掛けて、更に鞭を振るう。

「ぐ、あああつ！！」

火傷を負ったばかりで敏感になっっている背中を直接鞭で攻撃され、初めてファウストから悲鳴が漏れる。

それを満足げに聞きつつ、調教師は言葉を投げかける。

「いいか、てめえらは、人じゃ、ねえんだ、てめえらは、豚と、同じっ、家畜、なんだよっ！ 解ったら、二度と！ 生意気な、事を、するんじゃ、ねえっ！」

「っ……、ぐう！……ぎっ！あがあっ！」

一呼吸事に鞭を振り下ろし、調教師はファウストを痛め付けていく。飽和しかけた痛みに意識が朦朧としかけたとき、ファウストを守るように覆いかぶさり、身代わりとなって鞭を受け止める人影があった。

「お、前……どうして……」

「ああん？……ガキイ、俺の話が聞こえなかったのか？」  
誰あろう、その人影はハンコックだった。

「バカ、野郎……どうして、出て来ちまったんだ……」

ファウストが呻くように口にする。彼にしてみれば自分のせいでハンコックが傷つくことになるも同義なのだから、言わずにはいれなかった。

「五月蠅い！お主を見捨てたくは無かったのじゃ！」

だがハンコック自身も、どうしてファウストを庇うように出て来てしまったのか解らなかった。

マリーゴールドとサンダーソニアを守るなら、ただ見ているのが一番だったはず。

しかし、彼女の心の何処かが叫んだのだ。何も出来無くとも、彼をこのまま放っておきたくない、と。このまま彼を見捨てるのは、あの外道な男に屈する事と同義だ、と。

「ガキ………！」

調教師は心底憤怒していた。

自らの脅しを無視したばかりか、先の青黒い髪の子供とこの黒髪の少女は同じ目で自分を見ているのだ。

則ち、卑屈さや恐怖など微塵も無い目で。

正真の加虐嗜好者たる彼にとってはそれは最も嫌いな類の目で、それを向けた奴隷の少女に鞭を振り下ろしたくて仕方が無かったが、それは出来なかった。

何せ彼女は愛玩用奴隷。

見た目が第一の存在であるのに焼き印以外の傷など残してそれが天竜人に咎められれば、自分の首などあっさりと飛ぶ。

だから、彼は貯まったストレスを一番合理的な方法で消化することにした。

「おい、てめえらさっさとこいつらに印を付けな。そんで青いガキはあの部屋に運んどけ！」

「なっ！貴様らファウストをどうするつもりじゃ！！！」

「決まってるだろ？二度と脱走しようって気にならねえように教育すんのさ……」

「この、外道がっ！」

「カカカカツ！最高の褒め言葉を有り難う。さあ、連れてけ！」

悔しがるハンコックの声を聞きながら、朦朧とする意識のままにフ

アウストは妙な感慨を感じていた。

『男』の自分を庇って、ハンコックがあそこまで言ってくれている。勿論、ハンコックの安全面を考えればとても喜べないし、実際にハンコックに口にした事も本音の一つだが、

( やっぱり、嬉しいもんだな。『友人』に庇ってもらえるってのは…… )

心の何処かでそう考えてしまう自分は、やっぱりどっか間違っているのかなあ……と考えると、ファウストは意識を手放した。

「ソニア、マリィ。もう火傷は大丈夫か？」

刻印を受けてから一週間後。

この間は焼き印に因る痛みで起き上がる事すら困難な者が多かったが、それも漸く引いて来たらしく、もう痛み顔に顔を歪めている者は少なかった。

「はい、姉様。でも……」

「む？どうした、マリィ」

何かを言い淀むマリィゴールドに違和感を抱いたハンコックが質問し、サンダーソニアがそれに答えた。

「あの男……ファウストが帰ってきてません」

「むう……」

ハンコックとて、それは解っていた。今自分達が居る部屋は、最近奴隷になった者が纏められて居る部屋であるが、そこにファウストはこの一週間来なかつたのだ。

気にならない訳が無い。

なぜならハンコック達はファウストに責任のようなものを感じて居るのだ。自分達のせいで、彼は以前逃げる機会を失ってしまったのだと。

「確かに気になるが、私達には」

ざわっ……！

ハンコックが苦い顔で返事をする途中で、部屋がざわついた。入り口を見れば、鞭を持った調教師が入って来ている。

彼等は、奴隷達にとっての直接の恐怖の的だった。口答えや、下手な態度を取れば直ぐさま鞭が飛んで来るのだから。

しかし、今回は妙にざわめくな……とハンコックがそちらを確認して……目を見開いた。

「ファウストっ！！」

脚の鎖を引きずりながら、ハンコックは調教師の足元に転がる人型の赤黒い塊に近寄った。

「「ひっ！」」

それを見たマリーゴールドとサンダーソニアが悲鳴を上げる。



それは血まみれで、打撲、切り傷、鞭の跡に、火傷や貫通痕などが付き、目を覆いたくなるような惨状だったが……確かにそれはファウストだった。

僅かに胸が上下しているため死んでないことは解るが、逆に言えば胸が上下していなければ死んでいるも同然の惨たらしい姿だった。

真っ青になってファウストの前に膝を着くハンコックを満足げに見下ろすと、調教師は口を開いた。

言ったことは、要は逆らえばこうなるぞ、といった脅しであった。喰らえば即死な首輪の爆弾と違って、生々しい傷痕を残すファウストに奴隷が新たな恐怖を刻まれたのを確認すると、ハンコックに傷薬を放って調教師は去っていった。

無論、調教師達がわざわざそんな事をしたのには訳がある。

あの後、脱走未遂という前科のあるファウストを待っていたのは、酷い拷問だった。

後遺症などは残らなかったが、逆に言えば後遺症の残らない拷問の大抵は受けたかも知れない。

負傷が増え、いよいよファウストの生命維持に影響が出る寸前に毎回拷問師は痛め付けるのを止め、ファウストにわずかばかりの休息を与える。そしてある程度回復すれば再び拷問……の繰り返しなのだが、神様によって与えられ、更に修練を積み重ねた肉体と精神は、ひたすら強靱の一言に尽きた。

いかにその道のプロである彼等とて、殺さず、体以後を引かないよう手加減しなければならぬ状況で与える事の出来る苦痛だけでは、ファウストの心は縛れない。そのことを彼等が悟るのにそう時間はかからなかった。

そこで彼等が思い出したのが、ファウストが脱走に失敗した理由だ。そこから、調教師達はファウストが甘い性格をしていると判断。それを利用するため、わざと拷問で傷付いたファウストを薬まで添えて他の奴隷達と同じ部屋に放り込んだ。そうすれば、他の奴隷にとっては逃げればこうなるというみせしめに。

傷付いて他人に頼らざるをえないファウストは、恩という鎖に捕われる。

しかし、拷問を受けているファウストに近付いてとばかりを恐れる者が大半だったため、まともにファウストと関わったのはハンコック達だけだったのだが、それでも十分だった。

無論、ハンコック達がファウストと同じ人攫いによって連れて来られたということは確認済みのため、彼等はファウストを縛る枷を見つけたと、内心ほくそ笑んでいた。

そんな調教師達の考えを余所に、ハンコック達は直ぐさまファウストの手当をし……彼が目を覚ましたのは、驚くべき事にその次の日の夜だった。

海楼石の足枷を付けられていてこの早さ。いかに彼が強靱かを物語っていた。

「っ！……ここは……む？」

痛みに目を覚ましたファウストが先ず目にしたのは、安堵した表情を浮かべるハンコックだった。

「良かった……目を覚ましたのじゃな」

「目を？……そう、か。俺は拷問を、受けて……っ！」

「あ、バカ者！無理をするな。どれだけ怪我をしていたか忘れたのか？」

反射で起き上がろうとして体に痛みが走るが、ハンコックに留められる。

「ああ、スマン……迷惑をかけた」

「な、何を言っておるのじゃ！私達こそお前に迷惑を……私達がお前と話していなければ今頃お主はこんな事には……」

「そ、それは違うぞ！別にお前達を気にして逃げなかった訳じゃ……」

「では、どうしてわざわざ戻ってきた！こうなる事くらい解っていただろうに……」

「それは……」

沈黙が、二人に下りる。

問い詰められて上手くごまかせるほどに話が上手ければ良かったのだが、生憎話術の修業は積んでいないファウストである。

そうしていると、ハンコックが嫌な空気を振り払うように質問した。

「のう、ファウスト。本当の事を教えてくれないか。お主は、どうして戻ってきた？」

虚偽は許さないと、その美しい目が強く語っていた。

最初は何とか誤魔化そうと考えていたファウストだが……諦めた。

誤魔化しきれぬ気がしなかった。

「……確かに、ハンコック達が居なかったら俺はあの時そのまま脱出してただろうな。最終的にどうなるかは解らないけど、少なくとも今ここには居ない」

そのファウストの言葉を聞いてハンコックの顔が悲しげに歪む。

「……すまな「だが！」む!？」

謝ろうとするハンコックを遮り、ファウストは言葉を続けた。誤魔化すことは諦めたため、自らの考えを全部話すことにしたのである。

「俺は、お前達と会えたことを後悔していない。寧ろ感謝してるよ」

「……どうして」

「簡単。お前等と友人になれたからさ。お前等と会えたから、俺は一人じゃなくなった。だから万が一にも見捨てる選択をしたくなくてあの時逃げられなかったけど、それは俺が臆病だったのが悪いんであって、お前が気に病むことじゃない」

一気にまくし立てられたファウストの本心にハンコックは目を白黒させてながらも、弱々しく反論する。

「そんな、理由で……。でも、やはり私達と喋っていなければ……」

「言つとくぞ、ハンコック。お前は悪くない。それに、俺だって逃げなかつたらこうなる事くらい解ってた。拷問だって受けた。そりゃあ痛かったさ。でも！それは俺が道を選んだ結果なんだよ。そし

て今俺は、あの船でハンコックと会えて良かったと、本気で思えるんだよ。だから、それをお前に否定して欲しくないんだ。………俺にも聞かせてくれないか、ハンコック。俺と会うんじゃないか。………

たつて、思ってるか？」

ファウストの自白に顔を赤くした、ハンコックは顔を俯かせたまま首を横に振る。

「ああ、良かった。友人だと思ってるの一人よがりとかだったりしたらどうしよう、って考えてたんだ……… ってえ!？」

一旦安心したファウストが次に見たのは、顔を俯けたまま目から大粒の涙をこぼしているハンコックだった。

「ど、どうした!? 天竜人に何かされたのか!？」

大いにテンパるファウスト。

以前も泣き顔は見たことが有るが、その時とは違い今回は明らかに自分が涙の原因となっている為の大混乱である。

「………どうして………」

「え?」

涙に濡れたハンコックの目に宿る感情は、ファウストには読み取れきれない様々なものが混ざり合っていたが……… ファウストにも解る感情があった。それは、怒りと悔しさのまざった酷く苛烈な物だった。

「………どうして………私を、責めないの!」

自分はファウストにあつてからの短い間に、様々なものを彼から貰った。

彼に会わなければ、男性は今でも恐怖の対象だったし、自分が夜泣いていたときに慰めても貰った。船ではあれから何度も庇われたし、オークションハウスでも励まされた。

では自分は？ 誇り高き九蛇の戦士ボア・ハンコックはファウストに何をした？

何も、何も出来ていない。

だというのに、自分のせいでファウストは逃げる機会を逃してしまった。辛い思いをした。自分じゃ絶対に耐えられないような怪我まで負ってしまった。

「私は、ファウストと出会ってから……あなたの足を引っ張る以外に何も出来ていない！」

「ま、待ってくれ！ 調教師に鞭で打たれたとき庇ってくれたし、怪我を治療してくれたらろ！？」

「あんなものつ、……数の内になど入らん！ 結局はお主を助けられておらんのじゃぞ！？」

元凶は全て自分が足を引っ張ったからだ。なのに、彼は自分を責める所か、悪いのは自分だと、お前に責任は無いと、お前と会えて良かったとまで言った。

「それが私には我慢できない！ 悔しくて情けなくて堪らない！」

だが、ファウストがハンコックを氣遣ってそれらの言葉を並べたのかという点、否だ。

先程の問答で、ファウストは本気で自らの言葉を言っていると言った。ハンコックには解った。

それが理解できただけに、ハンコックを根底から支える九蛇の戦士としての精神はそれに耐えられなかった。

彼の優しさに。ただ、無償で与えられるということに。

自分のせいで傷付けた男の優しさを感じて、自分が本気で嬉しいと思ってしまうことに。

いっそ殴ってくれれば、どれだけ楽だったか。お前のせいだと言われれば、悲しくともどれだけ解放されたか。

「……解っておる。ファウストはなにも悪くない。私が悪いのだ。

私は今、子供みたいな我が儘を言っておる……」

これは意地だ。無償で受けるだけを許容できない、自らを友と認めてくれるものと対等でありたいという、戦士としてのバカらしい意地。それが自分でも解っていて、ファウストにそれをぶつけるのはお門違いの八つ当たりも良いところだと十分解っていた。

だから、尚更惨めになった。

言えば言うほど自分が情けなくなつて、最初は強かった語調もすっかり消沈してしまった。

「ごめんなさい……私が変な意地を張つて。泣いて。ますますお主を困らせて。自分の事しか考えておらん……最低だな、私は……」

「……………」

ファウストとしてはハンコックがこんな苦悩を抱えているなど全くの予想外だった。

何せファウストにとってハンコックは何もしてくれないどころか、十分な事をしてきているのだ。一人だった自らを救ってくれたのだから。

だが、これをハンコックに告げても彼女は理解を示してはくれないだろう。

何せ、真に一人である事を体感していないハンコックに、君が居てくれるだけで助かってる、等と言って納得できる訳が無かった。

二人の間の、決定的で、どうしようもない認識の齟齬だった。

「……ハンコック」

だが、ファウストは諦めなかった。齟齬があるなら、埋めれば良い。そのために人類には言葉が備わっているのだから。

俯くハンコックの手を取って、ゆっくりと語りかける。

自らの考えを、ハンコックに、自分がどれだけ救われているかを。

だが、やはりと言うべきか。それを聞いてもハンコックの顔は優れなかった。

無理も無い。ファウストは救われたと言っているが、彼女自身そんなことをした覚えは無く、いわばファウストがハンコックによって勝手に救われているだけに過ぎないのだから。

「……………で、さ。もしまだ納得できないなら……………今までの事は貸



しにしないか？」

「貸し……じゃと？」

「そう。いつか奴隷じゃなくなったときに、纏めて帰してもらおう。つてことださ」

ファウストにとっては、ハンコックとギクシャクしたままで居たくないが為の、ハッキリ言って苦し紛れに近いような提案だったが……ハンコックはそれに食いついた。彼女としても、自分でも抑え切れない感情を爆発させてしまったことを後悔していたから、この提案は渡りに船だった。

「……解った。では、改めて約束しよう、ファウスト」

「ん？何を」

「ヒューマンシヨップでお主の言ったことじゃ。絶対にお互い生きて奴隷から逃れよう。貸りを返さないままなど九蛇の戦士にあるまじき事じゃからな」

そう言つて涙を拭い、勝ち気な笑顔を浮かべてハンコックは小指を差し出した。

これは妥協であり、誤魔化しだ。そんなことはお互い理解している。だが、今の厳しい状況では、それで納得するしかない。何時の日か、お互いにとっての本当の納得を得るために。

だからファウストはハンコックの差し出した小指に自らの小指を絡めつつ、言葉を送る。

「解った、約束だ」

指を絡めたまま、何と無く解く機会を失って、気恥ずかしくなってお互いに顔を逸らす……。が、そのまま何でもないようにはっせられたファウストの言葉でハンコックは表情を凍らせた。

「あと、俺は少ししたらここから居なくなるだろうから……」

「なっ……！？ど、どういう事じゃ！詳しく説明せい！」

「あただだっ！解った、解ったから、掴まないでくれっ！」

「す、済まぬ。つい……」

「ふう。俺は怪我が治ったらシャボンディ諸島のコロッセオに行くんだよ」

それが、ファウストが奴隷として求められた役割。

奴隷と一口に言っても、色々な用途がある。

労働や愛玩などが一般的だが、中には少々変わった役目のものもある。

それがファウストに課された奴隷としての役割……戦奴隷。つまり戦うための奴隷である。

と言っても、今の時代は本当の戦に出る訳ではない。天竜人の戦奴隷とは、シャボンディ諸島7番MGに存在する闘技場コロッセオで、見世物の戦いをするための剣闘士として戦う事を言うのだ。

コロッセオの説明をした途端、ハンコックが酷く心配そうな顔にな

る。ファウストは自分達と違って直接的な命の危機を受ける事になる故である。

……もつとも、ハンコック達は数有る奴隷の中で一番天竜人と接近して居なければならぬ立場なため、一番の危機に直面していると云っていい状況な訳だが。

「まあ、そんなに心配しなくても大丈夫だ。俺は強いから」

「……………」

思いつ切り疑わしげな視線を送るハンコック。

まあ、包帯塗れの少年が言っても説得力は無いだらう。

「信じてないな？ ……まあ、良いや。というかゴメン、少し疲れた……………」

そう言つて、ファウストは布団に倒れ込んだ。

「……………済まぬな、病み上がりなのに長々と。だが、お陰で少し心が軽くなった。……………ありがとう」

気にするな、と言うようにファウストは手を振って、横たわって直ぐにやって来た睡魔に身を委ねるのだった。

それから五日後。

「それじゃあな、ハンコック。間違っても短気を起こすなよ？」

「ファウストこそ。負けたなど言う知らせは聞きたくないぞ」

回復してコロッセオに向かうファウストと、マリージョアに残るハンコック達は、奴隷屋敷の部屋で何故か別れの挨拶を許されていた。善意等では有り得ないその思惑も、ファウストには透けて見えるようだったが……自分にどうにか出来る事でないため、考えないようにしてハンコック達との別れを惜しんでいた。

「じゃあね、ファウスト」

「姉様との約束を破ったら、許さないから！」

二人の妹とも、最初に比べて随分喋れるようになった。

「ああ、解ってる。二人もしっかりな」

そう言つて、ファウストは二人の頭をぐしぐしと撫でる。

それから、何と無くうやましましそうな目で二人の妹を眺めているハンコックに、改めて別れを告げようとして、

「時間だ、クソ餓鬼」

いつの間にか現れた調教師が、首に付いた長い鎖を引っ張った。

「がっ!？」

首が締まり、無理矢理部屋の外に連れ出される。海楼石のせいで録に抵抗も出来ないままに引きずられてしまう。

「ファウスト！」

やはり心配そうな顔をするハンコック達に、最後の意地だと無理矢理笑顔を浮かべ、ファウストは叫んだ。

「約束は、絶対守る！何時かまた会おう！」

「……………っ！解った……………また！また何時か！」

そうやって、ハンコック達と慌ただしく別れた後……………鎖を引く調教師が、下卑た顔でファウストに語りかけた。

「ククク……………仲の良いことじゃねえか。うやらしいねえ……………」

「……………」

ファウストは、調教師達に対しては基本最低限の事しか喋らないし、反応だって返さない。

しかし、次の調教師のセリフには、反応せずには居られなかった。

「そうそう……………てめえがもし下で逃げようとしたら、あの小娘達がどうなるかわからないと思いな」

「……………高が調教師に、彼女等（天竜人のモノ）を傷付ける権利が？」

これは、予測できたことだった。わざわざ自分がハンコック達と会

うことを許したりしている時点で。  
即ち、調教師達はファウストにハンコック達という名の枷を付けたのだ。

「ケツ！動揺もしやがらねえとは、本当に生意気な餓鬼だ。だが、残念ながらためえにそれを教える気はねえな。確かめてえなら自分でやってみな。掛け金はあの小娘達の命だがな」

「クツ……！」

全く効果的だった。この一言で、事実上ファウストはもう自力では逃げられなくなってしまったのだから。

(……良いさ、何時かやって来るチャンスまで、俺が勝ち続けければ良い。弱肉強食。島と同じだ。負けなきゃ良いだけの事……)

何処か楽観的にそう考え、コロッセオに向かうファウスト。

だがファウストはこの時認識を誤った。

彼が今から向かう場所は、800年もの間、積もりに積もった澱そのもの。ありとあらゆる人の世の闇が入り混じった混沌たる世界。自らが知っている狭い世界に当て嵌めて考えることが間違っていたのだ。

ファウストがそれを痛感するのは、翌日、彼のコロッセオでの初めての戦いにて……その汚染された世界の洗礼を、その身をもって知った時のことであった。

第五話 奴隸生活・序章（後書き）

今回は、またも夜会話な回でした。

バトルが書きたいです……。

それと、感想、ご意見お待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2712q/>

---

ONE PIECE 不本意な転生者の生き様

2011年10月8日15時21分発行